

長野市の埋蔵文化財第6集

三輪遺跡

——三輪小学校地点遺跡第1～3次調査報告——

付 水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡調査報告

1980・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

当市は、教育環境の整備と相まって小学校、中学校の老朽校舎の改築を重点として推し進めてまいりました。

三輪小学校の校舎は、大正12年に建てられたもので、既に50有余年の歳月を経て老朽化してきましたので、昭和51年度から53年度にかけて改築することになりました。

この改築校舎敷地ならびに附近は、三輪遺跡と称して埋蔵文化財の所在地でありますので、改築工事に先立ち発掘調査を行うこととし、昭和50、51、53年度の3カ年にわたって実施したものであります。

今回の発掘調査にあたっては関係者のご理解ご協力を得て炎天酷暑の中をものともせず、発掘の調査目的に沿って惜しみないご努力とご精進をいただき順調な歩みを遂げ立派な成果を収めることができました。

この報告書が記録保存の使命を帯びて刊行されましたらうは、長く埋蔵文化財保護の旗印の一つとしてご活用いただけるならばこのうえない幸いであります。長野市遺跡調査会の皆さんならびに非常なご熱意をもってご援助くださった方々に厚く御礼を申し上げます。

なお、このような陰の努力があって新しい校舎が恵まれた環境の中に完成したわけでありますので、関係者が一体となって建物の管理に当たり、教育目的の達成に努められますようお願いいたします。

昭和54年3月31日

長野市長 柳 原 正 之

序

埋蔵文化財の保護処置が、法的に強く求められてきましたのは、文化財保護法が施行された昭和25年からであります。

当市の広い地域内には、65校の小学校・中学校が存在しますが、校舎敷地内には、埋蔵文化財包蔵地として確認されている学校があります。三輪小学校の敷地もこれに該当し、校舎建物の老朽化が著しいことから、昭和51年より53年にかけて改築することになりました。

当教育委員会では、長野市から委託を受けて、この遺跡の発掘調査をすることになり、関係担当課と協議を重ねた結果、昭和50、51年および53年度の3カ年にわたって当教育委員会の委託を受けた長野市遺跡調査会がこれにあたることになりました。

两年度共、きびしい炎天下にもめげず、調査会調査員の皆さんが、その責務を体し、予定期間内に滞りなく発掘調査を遂行されて、多大な成果をあげられましたことはご同慶に堪えません。

ここに遺跡調査会担当者のご努力により、報告書を刊行することになりました。本書によって、埋蔵文化財への認識を深めていただき、遠い過去の人々の生活に思いをはせながら、変動の激しい現代社会において、強く雄々しく生きるはぐくみともなれば望外の喜びであります。

終わりに、長野市遺跡調査会の皆さん、地域において非常な支えとご協力をくださった皆さん、ならびに熱心に励ましをいただいた関係の方々に、衷心から感謝を申し上げます。

昭和54年3月31日

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会長

中村博二

例 言

- 1 本書は昭和50・51年に長野市と三輪遺跡調査会と、昭和53年において長野市と長野市遺跡調査会との契約に基づいた三輪小学校改築に先立つ発掘調査報告書である。
- 2 本書は調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおいた。なお遺物の詳細については各次調査の図前頁に表にして記した。
- 3 遺構の番号は煩雑を避けるため第1次調査から発見又は調査順に付した。
- 4 遺構図は第1次が小平，第2次を佐藤，第3次を原が担当整図した。
- 5 遺物の実測は第1次が矢口，第2次を片山・原・岩佐・鳥羽が，第3次を原・百瀬・小林(秀)が担当し，整図は第1次矢口，第2・3次原が行ない，拓本は百瀬が担当した。
- 6 遺構写真は第1・2次が小林(孚)，第3次を矢口が担当し，遺物写真は第1・2次が矢口，第3次を竹内が行なった。
- 7 遺物実測図中，推定復元可能なものは鎖線で，黒色処理されるものは黒点で，赤色塗彩されるものは図中朱色で表示した。
- 8 遺構遺物の執筆は各調査員の作成した住居址等遺構カードをもとにおこない，文責は文末に記した。
- 9 関係図面，諸記録は長野市教育委員会で保管している。
- 10 なお，付録として昭和49年度に実施した水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡の調査報告を掲載した。
- 11 本書の編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。

本文目次

序文	長野市長柳原正之
序文	長野市教育委員会教育長 中村博二
例言	長野市遺跡調査会長
第1章 発掘調査の経過	1
第2章 遺跡周辺の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 第1次調査	5
第1節 調査の経過	5
1 調査区の設定	5
2 調査日誌	5
3 調査会（団）の編成	6
4 調査参加者一覧	7
第2節 遺構と遺物	7
1 第1号住居址	7
2 第2号住居址	7
3 溝址1	9
第4章 第2次調査	21
第1節 調査の経過	21
1 調査日誌	21
2 調査会（団）の編成	22
3 調査参加者一覧	22
第2節 遺構と遺物	23

1	第3号住居址	23
2	第4号住居址	24
3	第5号住居址	24
4	第6号住居址	25
5	第7号住居址	25
6	第8号住居址	26
7	第9号住居址	26
8	溝址2	27
9	溝址3	27
10	溝址4	27
11	グリット出土遺物	27

第5章 第3次調査 43

第1節	調査の経過	43
1	調査日誌	43
2	調査会の編成	44
3	調査参加者一覧	45
第2節	遺構と遺物	45
1	第10号住居址	45
2	第11号住居址	46
3	第12号住居址	46
4	第13号住居址	46
5	第14号住居址	47
6	第15号住居址	47
7	第16号住居址	47
8	土塋1	48
9	土塋2	48

第6章 三輪小学校遺跡について 60

おわりに	62
------	----

付 目 次

1. 調査の動機と経過	付 1
(1) 調査の動機	付 1
(2) 分布調査とその経過	付 1
(3) 調査区の設定	付 2
(4) 調査日誌	付 2
(5) 調査団の編成	付 3
イ 分布調査	付 3
ロ 本調査	付 3
2. 遺跡周辺の環境	付 4
3. 遺構と遺物	付 4
イ 第1号住居址	付 5
ロ 第2号住居址	付 5
ハ 第3号住居址	付 6
ニ 第4号住居址	付 6
ホ 第5号住居址	付 7
ヘ 第6号住居址	付 7
ト 第7号住居址	付 7
チ 第8号住居址	付 8
リ 第9号住居址	付 8
ス 第10号住居址	付 9
ル 弥生時代土壌	付 9
ヲ 平安時代及びそれ以降の土壌	付 9
ワ 柱 穴 群	付10
カ 溝 址	付10
ヨ 住居址及びトレンチ出土の石器	付11
4. 水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡について	付11
おわりに	付15

挿 図 目 次

第1図	三輪遺跡(三輪小学校)周辺の主要遺跡分布図	12
第2図	調査地及び遺構分布図	13
第3図	第1次調査遺構分布図	14
第4図	第1号住居址, 溝址1実測図	15
第5図	第2号住居址炭化物出土状態実測図	16
第6図	第2号住居址実測図	17
第7図	第1号住居址出土土器	18
第8図	第2号住居址出土土器	19
第9図	第2次調査遺構分布図	34
第10図	第3～5号住居址実測図	35
第11図	第6～9号住居址, 溝址2～4実測図	36
第12図	第3・4号住居址出土土器	37
第13図	第4・5号住居址出土土器	38
第14図	第6・8号住居址・溝址出土土器	39
第15図	グリット出土土器	40
第16図	グリット出土土器	41
第17図	第3次調査遺構分布図	51
第18図	第10～12号住居址実測図	52
第19図	第13・15・16号住居址実測図	53
第20図	第14号住居址, 土壙1・2実測図	54
第21図	第10～12・14号住居址出土土器	55
第22図	第14号住居址出土土器	56
第23図	第14・13号住居址出土土器	57
第24図	第13号住居址出土土器拓影	58
第25図	第14号住居址出土土器拓影, 第14号住居址出土凹石, 第11号住居址出土紡錘車・鉄製品	59

付

第1図	小島・十二微高地上遺跡群（『上水内郡誌』より）及び調査地	付21
第2図	調査トレンチ及び遺構分布図	付22
第3図	第1・5号住居址	付23
第4図	第1住居址群（2～4号），溝址1	付24
第5図	第6・7号住居址	付25
第6図	第9号住居址，溝址2，第10号住居址	付26
第7図	第8号住居址，土壇5～8，ピット群	付27
第8図	第1号（1～4）第2号（5～9）第4号住居址出土土器	付28
第9図	第4号（1～4）第5号（5～16）住居址出土土器	付29
第10図	第6号（1～6）第7号（7～15）住居址出土土器	付30
第11図	第9号（1～3）第10号（4～7）住居址，土壇1（8～10）， グリット（11～15）出土土器	付31
第12図	第2号住居址（1）第4号住居址（2～6），土壇1（7～8） トレンチ（9～10）出土石器（1～3）	付32

図 版 目 次

第1図版	三輪小学校遺跡遠景・第1次調査地近景
第2図版	第1号住居址・同遺物出土状態
第3図版	第2号住居址炭化材残存状態
第4図版	第2号住居址炭化材残存状態
第5図版	第2号住居址・第1・2号住居址及び溝址1
第6図版	第2号住居址溝状遺構・溝址1
第7図版	調査スナップ
第8図版	調査スナップ
第9図版	第1・2号住居址出土土器
第10図版	第2次調査遺構分布状態
第11図版	第4・5住居址・第4号住居址カマド
第12図版	第4号住居址遺物出土状態
第13図版	第6～9号住居址
第14図版	第8号住居址・溝址2・3

- 第15図版 調査スナップ
- 第16図版 第3・4号住居址出土土器
- 第17図版 第5・6号住居址出土土器
- 第18図版 溝址2・3, その他出土土器
- 第19図版 第10・11・14・16号住居址
- 第20図版 第11・12住居址
- 第21図版 第11・14号住居址
- 第22図版 第14号住居址・土壙2
- 第23図版 第14号住居址
- 第24図版 調査スナップ
- 第25図版 第10・14・13号住居址出土土器

付

- 第1図版 遺跡近望・第Ⅰ住居址群(第1～4号住居址)
- 第2図版 第Ⅰ住居址群(第1～4号住居址)
- 第3図版 第5号住居址・同集石出土状態
- 第4図版 第6号住居址・第Ⅱ住居址群(第7～9号住居址)
- 第5図版 第Ⅱ住居址群(第7～10号住居址)
- 第6図版 第1・3号土壙
- 第7図版 柱穴群・柱根
- 第8図版 住居址遺物出土状態
- 第9図版 出土遺物(第2・4号住居址)
- 第10図版 出土遺物(第4・5号住居址)
- 第11図版 出土遺物(第6・7・10号住居址)
- 第12図版 出土遺物(第1号土壙出土土器, 住居址・グリット出土石器)
- 第13図版 出土遺物(第5号住居址集石・ピット群柱根)
- 第14図版 調査スナップ

第1章 発掘調査の経過

三輪小学校は昭和46年の新館建設後、長期計画で木造老朽校舎の改築計画が進められていた。現存木造校舎は大正12年の火災後に復旧校舎として建築されたもので、すでに50有余年の歳月を経ており、また近年は、松代地震の天災によりその老朽化は一段とすすんでいた。このような現状の中で、長野市教育委員会は老朽校舎新改築事業の一環として、この老朽校舎2棟を昭和50年・昭和51年度で新改築すべく準備をすすめていた。

しかし、この地域における埋蔵文化財の調査は旧市街地であり、また住宅密集地でもあるため分布調査等は遅れており、遺跡の存在の有無はあまり明確にはされていなかった。ただ美和神社周辺より遺物の出土を聞くにつけ、同神社と地続きの三輪小学校敷地も遺跡の可能性があるかと推定されていた。

ところが昭和50年になり、新改築予定校舎の南前庭の簡易水道埋設工事に伴って、その残土中に平安時代を中心とする土器・陶器の破片を発見し、いよいよ遺跡の可能性は強まった。そこで関係諸方面と協議を重ねた結果、新改築工事開始に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査を実施することに決定した。時あたかも「浅川西条遺跡」の調査を目前に控えて、二頭立ての調査はかなりの困難が予想されたが、校舎取り壊しの期間を考慮して、浅川西条遺跡終了後に、その調査体制をそのまま継続する形態で昭和51年8月25日から9月7日までの期間で約1,000m²の調査に臨むことになった。

翌51年度にも第Ⅲ期教室棟の増改築が予定され、第1次調査の結果から、三輪小学校付近の微高地上はすべて古墳時代～平安時代にかけての遺跡であると推定されるので、昨年に引き続き第2次調査を実施することになった。期日は7月25日から8月12日まで約600m²を調査することになったのであるが、遺構が複雑に重複しあい、また攪乱が著しかったので調査終了日は8月17日になった。

当初計画ではこの時点で埋蔵文化財の調査は終了する予定であったが、昭和52年度に新たに管理棟の改築がもち上がり、過去の調査結果をみるまでもなく調査をする必要があったので、関係各機関・各員に調査団の編成、調査期間等協議を行ない、長野市内の埋蔵文化財の調査を調整し、調査面積約600m²に昭和53年6月3日から6月10日を調査日にあて、調査を実施した。尚各次の調査には、上屋破毀した後の調査であるので、重機により雑物及び表土の除去を行なった。

(事務局)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

長野市三輪遺跡は長野市三輪8丁目3-2に所在する。長野市三輪小学校敷地内を内包する。長野電鉄長野・須坂線の本郷駅西に美和神社と軒を並べている。標高は約378mで方角は本郷駅より北西の位置にあたる。

三輪は、閑静な住宅街として発展している。

この辺りは、浅川扇状地の西側扇端部に相当する。浅川は、飯縄山腹に源を発し、山肌を刻み、浅川東条を谷口として善光寺平に押し出してくる。途中で駒沢川・徳間川などと合流して、吉田・古里を灌流して豊野町浅野の東で千曲川に入る。この浅川により作出された扇状地が浅川扇状地である。

浅川扇状地は、浅川東条周辺を扇頂部とし、東は若槻東条に突出してくる三登山の支峰を側端とし西は城山東の急斜面を側端とし、その扇端部は丁度、長野電鉄の善光寺下駅より、信濃吉田駅にかけての軌道とほぼ一致している。先述の本郷駅は、善光寺下駅と信濃吉田駅とのほぼ中間地点にあり、従って扇端部が最も南に張り出した所となる。

扇端部特有の地理的条件である伏流水の地表湧出による水の便は良好である。

扇状地の東西両側端は、活断層活動が沖積世に入っても活発に継続したため沼地に近い湿地を形成していたと考えられる。また三輪遺跡の周辺は、湧水を各所にもち、扇端部とそれに続く泥湿地帯であったと考えられる。

三輪遺跡は、いわば扇端部に位置する遺跡である。

昭和20年前後の頃には、三輪遺跡南方は長野電鉄軌道を境として、途中さえぎるもののない一面の水田であった。「三輪田圃」と呼ばれていたところである。おそらく見霧^{はる}かす茫漠とした水田の風景は、古代と比してまさほどの違いはなかったと記憶している。

第2節 歴史的環境

長野市三輪遺跡は、発掘調査の実施された現在の三輪小学校の校名に由来した遺跡名として呼称するに至った経緯はあるが、本来「三輪」の名称は、三輪小学校とそれに隣接する美和（三和）神社に示されるように、これらの学校・神社の所在地の周辺地域一帯の村落名であったと考えられる。

「三輪」は、古来より水内郡芋井郷に帰属し、三輪の村（ムラ）と称してきたが、現在は長野市三輪と呼ばれる長野市の町制区画を構成して今に至っている。

長野市三輪遺跡周辺の歴史的環境を概観するために、本遺跡東方向に道路一本を隔てて隣接する美和神社を地理的には中心にしてその概略を記してみたい。

美和神社の創建年代の詳細は未だ不明であるが、延喜式神名帳には、水内郡九座の一社として記載されており、古来より祭神は^{み おおものぬしのかみ}三輪大物主神・相殿は^{くになりひ めのかみ}国業比売神と伝承されている。現存の美和神社の境内はかなり広大であるが、往古の規模は不明である。しかし、その位置はおおむね不動であろうと考えられている。

美和神社が、この地域の中心的な神社として重きをなし、さらに中央とも何らかの結びつきがあったと考えられる出来事としては、「三代実録」清和天皇の貞観8年（866）2月7日の条に、「神祇官奏言。信濃国水内郡三和。神部兩神。有忿怒之心。可致兵疾之災。勅。国司講師虔誠潔齋奉幣。并転読金剛般若経千卷。般若心経万卷。以謝神怒。兼厭兵疾。」と記録されていることである。すなわち、朝廷の命により信濃国司が齋戒沐浴して、金剛般若経千卷・般若心経一万巻を転読して、これにより神怒をしずめ奉った、というのである。

ちなみに貞観8年には、都では応天門の変事があり、藤原一門が他氏排斥に成功し、良房が人臣初の摂政となり、藤原氏摂関政治の基礎が成立した年である。

中央の動きが、何等かのカタチで三輪周辺の地域に勅をもたらしたのか。興味のある論も生起されるが、本題より逸脱するので別の機会に譲りたい。

この頃の美和神社の詳細については不明な点が多々あるにしても、集落の自然的発達に伴って神社が発生してくる事例もあることより、すでに美和神社成立以前に、この地域周辺には多くの人が住みつき、生産活動に従事していたことはまちがいない、すくなくとも奈良朝末期より平安朝初期にかけては、この「三輪」の地はかなりの繁栄があったと考えられる。

さて美和神社周辺の地域からの考古学的証左であるが、今回の一連の三輪遺跡発掘調査以前には、一・二の調査を除いては、これという新事実もなく今日に至った。

浅川扇状地扇端部に立地する三輪周辺には、現在までのところ、先土器・縄文期の遺跡は確認されていない。やはり圧倒的に多いのは土師器・須恵器を出土する個所である。そして弥生式土器の出土である。未確認ではあるが、三輪小学校北裏の辺に古墳と覚しき遺構もあったそうであるが、現在は宅地化のために往時の面影をとどめていない。

このような遺跡群を三輪在住の郷土史研究者である霜田巖氏は、三輪遺跡あるいは三諸遺跡と呼んでいる。

霜田氏によると「相ノ木から本郷にかけての此等遺跡を三輪遺跡と名付けている。」（新産都市建設の為の埋蔵文化財緊急調査報告一長野12号）、また「美和神社を北限の中心として、鐘居堰を南限とし、西は西組境まで、東は返目境まで拡がり中心に本郷をはさむ地域を三諸前と呼んでいる。……この区域内からは割合に多くの土器や石器が出土するので、これを私は三諸遺跡と呼んでいる。」（美和神社とその周辺）と記している。

美和神社・三輪小学校は、霜田氏提唱の三輪遺跡内に包含されるので、遺物・遺構包蔵地域は更に三輪小学校から美和神社の境内にまで及ぶことが考えられる。

この三輪・三諸両遺跡内には点々と遺物出土地点が確認されているが、これ等の出土地点を逐一に「点」として確認しながら、巨視的に『面』としての追求をしていくことは、今後に予想される三輪遺跡の集落的構成を想定する上にも重要と考える。

次に三輪・三諸両遺跡において出土する遺物より、この両遺跡存在の時間帯、すなわち時代をみてみたい。

三諸遺跡内に存在する、三輪本郷旭幼稚園遺跡出土の弥生式土器を、調査者の笹沢浩氏は百瀬式土器との類似性を指摘しながら、中期末の土器として説明している(『上水内郡誌』歴史編) さすれば、この周辺地域には、弥生時代中期末の頃より人々の生活の痕跡が認められることになる。浅川扇状地及びその周辺より出土される吉田式土器・箱清水式土器・御屋敷式土器と呼ばれる後期弥生式土器に代表されるように、中期末頃より後期全般を貫いて人々の生活の舞台となっていたことが理解されてくる。

そして、古墳時代を迎えるわけであるが、美輪神社周辺には先述した伝承の古墳以外に確たる存在は認められない。三輪小学校北裏の古墳と伝えられる遺構も含めて今後の調査に期待したい。しかし古墳時代の土器である土師器・須恵器の出土例は豊富であるので、古墳時代以降の古代の人々の生活も十分に実証できるはずである。

こうして、遺跡・遺物の概況より、この「三輪」の地は往古より人々による繁栄の面影が偲ばれるのである。

次にこの地における繁栄の基盤となった生産の形態について考えなければならない。先述した時間帯(時代)から水稲耕作を想定したい。浅川扇状地の扇端部に沿って存在するであろう三輪遺跡群は、扇端部に続く沼沢地も含めた泥湿地を水田として活用することは容易であったと思われる。現在これを立証する手立てはまことに少ない。三輪周辺の地理的条件、遺跡の立地条件、遺構のあり方、遺物の出土状況、土器のセット状況を総合的に理解して、水稲耕作の存在を学説に従って状況的に説明することは可能な段階にある。

しかし、ここで改めて検討するに値する課題として三輪遺跡南方を想定した「条里遺構」の存在を指摘しておきたい。条里遺構については、故岩崎長思氏、大場磐雄博士らの論稿もあり、米山一政氏の指摘もある。改めて先学の論稿を復習して、現代の考古学の到達している方法論に立脚した研究を提唱したい。現在残っている古地名の中にも、「本郷」「返目」などという古代集落、条里遺構に関係する地名もいくつか存在している。大方の御教覧も得たいと願っている。

以上まことに雑駁であるが、三輪遺跡周辺の歴史的環境を述べさせていただいた。

(小林 孚)

第3章 第1次調査

第1節 調査の経過

1. 調査区の設定

調査範囲は校舎改築地内に限定されており、またほぼ西にある木造校舎新改築が次年度（昭和51年）計画にあることを考慮して、既設校舎中央を30ラインとし、東西にアルファベットを、南北に30を基点として北に増し、南に減ずる数値でグリットを表現することにした。A30は任意であるが、第2次調査のため学校基準石を基点としてある。グリットは3m×3mで設置してある。

2. 調査日誌

8月25日（月） 木造校舎の廃棄作業が遅れており、ブルドーザーとダンプカーの行き交う中で調査を開始する。ブルドーザーの間隙をぬって遺物包含層・遺構面の土層確認に努める。遺構は黄褐色砂質土層に掘り込まれ、上層に円礫混りジャリ層が覆っているようである。

8月26日（火） A～D28, B・D26グリットの調査を行なう。前者より住居址と思われる落ち込み、後者からは西に溝、東に住居址の南壁らしきものを確認した。

8月27日（水） ブルドーザー撤去後、A30付近において焼土の広がり認められたが、精査の結果、大正12年の火災による痕跡であることがわかった。本日の調査で確認された遺構には、西側発見のものは第1号住居址、東側発見のものは第2号住居址と命名する。

8月28日（木） 調査範囲内のグリット調査に全力を傾注したが、昨日までに確認した遺構以外には何も無いとの結論を得たので、各遺構のプランの露呈に調査の重点を移す。

8月29日（金） 第1号住居址のプラン確認と第2号住居址の規模把握の調査を進める。

8月30日（土） 第1号住居址の調査を進める。遺構確認面下約15cmの位置に焼土を認め、注意をして調査を進める。焼土附近より高坏・甕形土器の破片が出土した。第2号住居址のプランの露呈はブルドーザーの軌道跡とジャリ層により困難を極めたが、一辺9m以上の大形住居址になるもよう。

8月31日（日） 第1号住居址は遺物出土状態、焼土の位置実測と写真撮影を行なう。第2

号住居址はプランの検出を急ぐ。遣り糸の配置作業を開始する。

9月1日（月） 第1号住居址の周溝，柱穴，カマド等内部施設の精査を行なう。第2号住居址は東壁，北壁のプランを追求しながら，すでに周知している西部，南部方面から遺構内調査を開始する。建築材と思われる木炭片が火災を受け倒壊した状態で検出され，注意して調査を進める。

9月2日（火） 第1号住居址の完掘と写真撮影を行なう。第2号住居址は昨日と同様にプランの追求と炭化材の検出を進める。北壁の一部は廃棄校舎の便所の位置にあたり，コーナー附近は完全に確認できたが，それに続く壁の一部は損壊を受け検出は不可能であった。

9月3日（水） 第2号住居址の炭化材の検出を行なう。北壁附近は攪乱のため不明確の箇所があるのが残念である。炭化材の遺存状況実測及び写真撮影を行なう。その後，炭化材の撤去作業を実施する。

9月4日（木） 第2号住居址の炭化材の撤去作業と併行して内部施設の精査を続行する。

9月5日（金） 第2号住居址の柱穴，カマド，周溝等の内部施設の精査を行なう。溝址の調査を行なう。

9月6日（土） 第2号住居址の清掃の後，写真撮影・実測作業を行なう。

9月7日（日） 昨日に引き続き実測作業を行なう。本日で現場における全調査を終了する。

3. 調査会（団）の編成

調査会長 中村 博二（長野市教育委員会教育長）

調査団長 米山 一政（日本考古学協会々員・長野市文化財保護審議会会長）

〳 主任 小林 孚（〳 〳 〳 須坂高校教諭）

〳 副主任 小林 秀夫（〳 〳 〳 篠ノ井西中教諭）

調査員 小平 和夫（長野考古学会々員・信大学生）

〳 一条 隆好（〳 〳 〳 ）

〳 片山 徹（〳 〳 〳 ）

〳 佐藤 信之（〳 〳 〳 立正大学生）

〳 岩佐 哲夫（〳 〳 〳 信大学生）

〳 宮川 信子（〳 〳 〳 ）

調査補助員 横山 勝之（明大学生）・桐山芳信（早大学生）・今井 敏 天（中大学生）・山浦 哲夫（予備校生）

事務局長 三井 茂（社会教育課長）

担当局員 松橋 順（〳 〳 課長補佐）

〳 松岡 成男（〳 〳 文化財係長）

担当局員 矢口 忠良（社会教育課文化財係主事）

4. 調査参加者一覧

PTA 大石つな子・加藤恵美子・小林和子・小林京子・小林袈裟一・小林民子・小林良子・小林元江・相馬貞良・相馬と志子・露木久・中村林子・西沢久子・長谷川たによ・広田みどり・藤沢幸代・松本菊子・三原田しめ子・横地元子, (会長 小林袈裟一)

(事務局)

第2節 遺構と遺物（第2・3図）

1. 第1号住居址（第4・7図, 第2・9図版）

遺構 調査地西側より単独で検出した。プランはやや胴張りの隅丸方形を呈し、主軸はN-15°-Wを指す。規模は主軸5.05×東西軸4.80mであり、掘り込みは傾斜に添って北で深く、38cm, 南で浅く18cmを測る。床面は平坦で、砂利混り黄褐色砂質土で堅い。柱穴は径30cm・深さ35~40cmのものが方形に配列される。他は支柱穴であろう。カマドは北壁中央に設けられているが、調査時には破壊され、焼土を残すのみであった。焼土の範囲は主軸方向に110cm・巾60cmで、壁外に煙道が50cm程伸びる。このカマド右手に径65cm・深さ40cmの円形ピットがあり、貯蔵穴であろうか。その他カマド右側及び南壁西隅付近を除き巾15cm・深さ10cm程度の周溝がめぐる。

遺物 出土量が多い。器種に杯部内面黒色処理され、脚部がラッパ状に開く高坏形土器、椀形と口縁部が体部より段をなし外開する坏形土器、口縁部がわずかに外反し、体部が直線的になる甑形土器、口縁部が直立的に開く壺形土器、口縁部及び体部上半がゆるく外反し最大径が体部上半にある長胴化したものと頸部がくの字形に屈開し、最大径が体部中央にある球形胴の甕形土器がある。この他覆土より肩部下に一条の沈線がめぐり、その上下に櫛状工具より施文される甕形の須恵器が1点出土した。

2. 第2号住居址（第5・6・8図, 第3~6・9図版）

遺構 第1号住居址東側に位置し、調査地のほぼ中央に位置する。また溝址と重複する。本住居址は第1号住居址にみられるような該期の通常の住居址と趣を異にしている点注意される。

その1として形態規模が大きいことである。主軸方向はN-12°-Wを指し、主軸11.8m×東西軸9.7mを測る、南北壁がやや胴張りであるが、基本的形態として方形に近いプランを呈

する。掘り込みは黄褐色砂質土・同ジャリ層を直に近く、深さは地形の傾斜により、東壁で18cm・西壁で10cm・南壁で7cm・北壁で40cmをそれぞれ測る。床面はやはり地形の影響を受け北に高く南に低いが、平坦で、下段床面は堅緻である。周溝は南西隅付近及び東壁下の一部に認められる。

その2として西側・南側・及び東側の一部に所謂ベッド状遺構を有する点である。有(上)段床面巾は各々壁より西側で0.8m・南側で1.3m、東側で1.35mを測る。この床面は平坦であるが、内方にやや傾斜する。下段床面までの壁高は、東で9cm・西で21cm・南で16cmを測り、また西及び南の西側壁下に深さ6cmの周溝がある。

その3として南北壁からのものは少ないが、各壁の内外壁直下及びその付近より壁に直角に張り出す溝状遺構の存在である。東壁からのものは7本あり、45~75cmの配置間隔を有し、溝巾は20~68cmで、張り出し全長は85~175cmを測り一様でない。またこれらの溝の先端には径36~42cm・深さ8~18cmのピットが付設される。西側は外壁下より4本認められ、そのうち2本は内壁内に張り出し、深さに段差がある。溝間距離は68cm~100cmで、その巾は20~50cm内にあり、全長は90~230cmを測る。深さは上段床面で7~12cmで、下段床面のものには10~13cmを測る。やはり先端は径50cm前後の深さ8~13cmのピットを有する。南側は4本認められるが、西方隅近くのものが外壁下より張り出すほかは内壁内よりのものである。内壁内の溝間隔は150cmと160cmであり、溝巾は30~50cmで、全長は90~110cmを測る。深さは8~12cmである。先端にピットは有しない。

その4として柱穴の件である。支柱穴は一辺6m前後の方形配列4個であり、その規模は径70~106cmで、深さ36~51cmを測る。また中央西よりの主軸線上に2個の対をなす棟持柱と推定される径60cm、深さ47cmと58cmのピットがある。この他に、西側内壁付近に径30~40cmと72cmで、深さ10~20cmのピットが直線に並び、その間隔は南よりそれぞれ2.7m・1.7m・1.8m・0.9mを測定する。また南側内壁付近にも2個あり、径50cmと62cm、深さ18cmと46cmをそれぞれ測る。

その5に以上の形態と離れるが、本住居址は火災にあったと思われ、主として東西壁から中央に向け多量の炭化材を残す。炭化材の材質は柳に想定されるが、定かでない。材は残存状態から径10~20cmの太さのもので、自然木をそのまま利用している。外壁内から内壁にかけて多く残存しており、材の倒壊方向は主軸にたいしやや北よりである。小屋組は住居址壁に対して縦材の上から固定したやり方で、横材は東側で3段、西側で5段認められる。東側でのその間隔には一定性はないが、西側では50cm前後の範囲で検出された。また住居址中央付近及びカマド周辺からは全く検出されず、また支柱穴・溝に伴うと思われる用材は確認されなかった。

一般例としてのカマドは北壁中央付近に設置されるが旧校舎の便所の位置にあたり、その建設時に壁ともに破壊を受けていて、その形態を示すものは後述のものと焼土にすぎない。形態は粘土製両袖形と推定され、壁直下に1.4×0.56mの、高さ0.28mの張り出し段を構成し、そ

の遺構上及び床面に中央に向け長さ1.6m・巾1.3mの範囲に焼土が認められる。その他床面に焼土塊が残存する。

遺物は主としてカマド周辺より甕形土器・コシキ形土器・坏形土器片が多く認められ、また東壁下北よりに小形壺形土器・高坏形土器が出土している。

遺物 坏形土器は比較的少なく、むしろカマド周辺より甕形土器の出土量が多い。坏形土器においては、丸底・球形体部及びそれと接続する口縁部は大きく外反気味に外開し、口唇部へ漸減し、所謂カブト状になる。次に短頸壺として薬壺形のもの大・小2点出土している。小は手中に入り、全体に偏平で丸味を帯び、口縁部が内傾し、その部位下方に2対の小円孔を有したものである。大は所謂ロクロ整形を有するもので、ヘラ削りのため肩が張り、稜を残し、最大径は体部中位にある。口縁部は短く、直立する。甕形土器は頸部が立ち上がり、口縁部はわずかの角度で外開する。

溝址1（第4図，第6図版）

遺構 第1・2号住居址の中間にあり、第2号住居址の北西部隅付近を切る。流路は標高に従い、ほぼ南北にはしり、調査地中位附近で2本の流路にわかれる。巾は上流で1.82m・深さ12cmで、下流で巾2.1m、深さ16cmを計測する。

遺物 出土量は少なく、覆土に土師器坏・甕形土器片・須恵器甕形土器が出土しているにすぎない。

（矢口忠良）

土器一覧表

第1号住居址(第7図)

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	高坏		13.9		口縁部は外反、坏底部は丸底 脚部はラッパ状に外開	ヨコナデ、ヨコ・タテヘラミガキ 脚内面ヘラけずり	小砂	良好	赤褐色	黒色	覆土
2	〃		15.7		口縁部は直線的に外開 体部下に鈍い稜 脚部欠損	ヨコナデ、タテヘラミガキ	〃	〃	〃	〃	〃
3	〃		18.4		口縁部は直線的 体部下に鈍い稜 脚部欠損	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃			10.4	坏部欠損 脚部はラッパ状に外開し、 短い	タテヘラミガキ	〃	不良	〃	赤褐色	〃
5	坏	(4.8)	13.4		碗形、口縁部は外反し、有段になる。 底部丸底	ヘラミガキ	〃	良好	黄褐色	黒色	床面
6	〃	(4.9)	13.8		口縁部は直線的、体部下半に稜 底部は丸底	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃
7	〃	5.5	12.3		頸部から大きく外開 内面有段 丸底	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	甕	(4.8)	13.6		杯形、口縁部下に鈍い稜 平底?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃		13.4		口縁部短かく外反、体部筒状 最大径口縁	ヘラナデ、ヨコナデ	〃	不良	黄褐色	黄褐色	〃
10	〃		11.0		口縁部は直立し、漸減 頸部以下欠損	ヘラミガキ	〃	良好	赤褐色	赤褐色	覆土
11	〃		18.9		口縁部は短かく直立的、体部は直立的 頸部は有段	ヘラナデ、ナデ	〃小石	〃	〃	黄褐色	カマド
12	〃		18.4		口縁部は短かく、緩く屈開 最大径は体部上・長胴	ヘラナデ、ヨコナデ	〃	〃	〃	赤褐色	〃
13	〃		23.4		口縁部は外反、最大径体部中位 長胴形	〃 〃	〃	不良	〃	〃	〃
14	〃	28.0	15.4	5.6	くの字形頸部・球形胴 最大径体部中央下	〃 〃	〃	良好	〃	〃	床面
15	罎				肩部に最大径、球形	櫛状工具、棒状工具による施文	小砂	〃	青灰色	青灰色	覆土

第2号住居址(第8図)

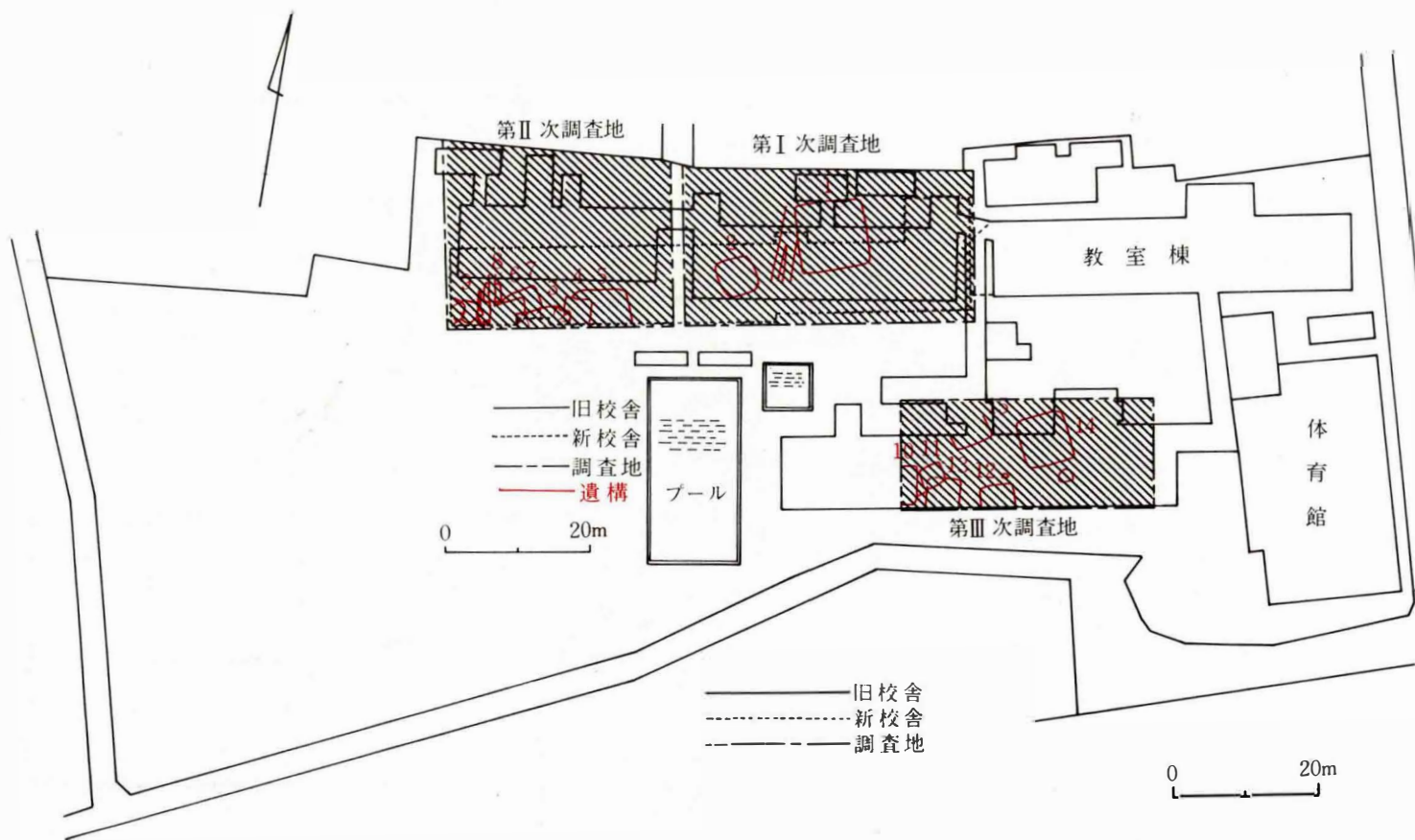
1	高杯	15.2	18.3	11.5	口縁部は立ち上がり、有段で平底的 脚部ラッパ状・三角窓3孔	内面ヨコヘラケズリのちなで	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	床面
2	〃	14.0			脚部のみ、ラッパ状	〃	〃	〃	〃	〃	カマド
3	杯	6.2	14.2		口縁部は屈曲しながら外開 底部有段丸底	ヘラミガキ・ヨコナデ	〃	〃	〃	黒色	〃

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
4	坏	7.2	15.2		3より大形、体部碗形の他同じ	ヘラミガキ・ヨコナデ	小砂	良好	赤褐色	黒色	床 面
5	壺	5.2	5.2		壺形態・口縁部は内傾・最大径は体部中央・丸底・口縁部に1対2孔	ヨコナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
6	(瓶)		16.0		口縁部に最大径・直線的	ヘラナデ	小砂石	不良	〃	〃	〃
7	瓶	15.2	18.3	11.5	口縁部は外反・最大径体部から底部に集約・1孔	〃・ヨコナデ	〃	〃	〃	〃	カマド
8	壺		11.8		短頸・直立・肩が張り、最大径は体部中央	〃 〃	〃	良好	黒褐色	赤褐色	覆 土
9	甗		15.2		口縁部は外反、頸部以下欠損	ヘラナデ・ヘラケズリのちナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	カマド
10	〃		20.3		口縁部は外反、頸部は立ち上がる最大径は体部中位	ヨコナデ・ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃

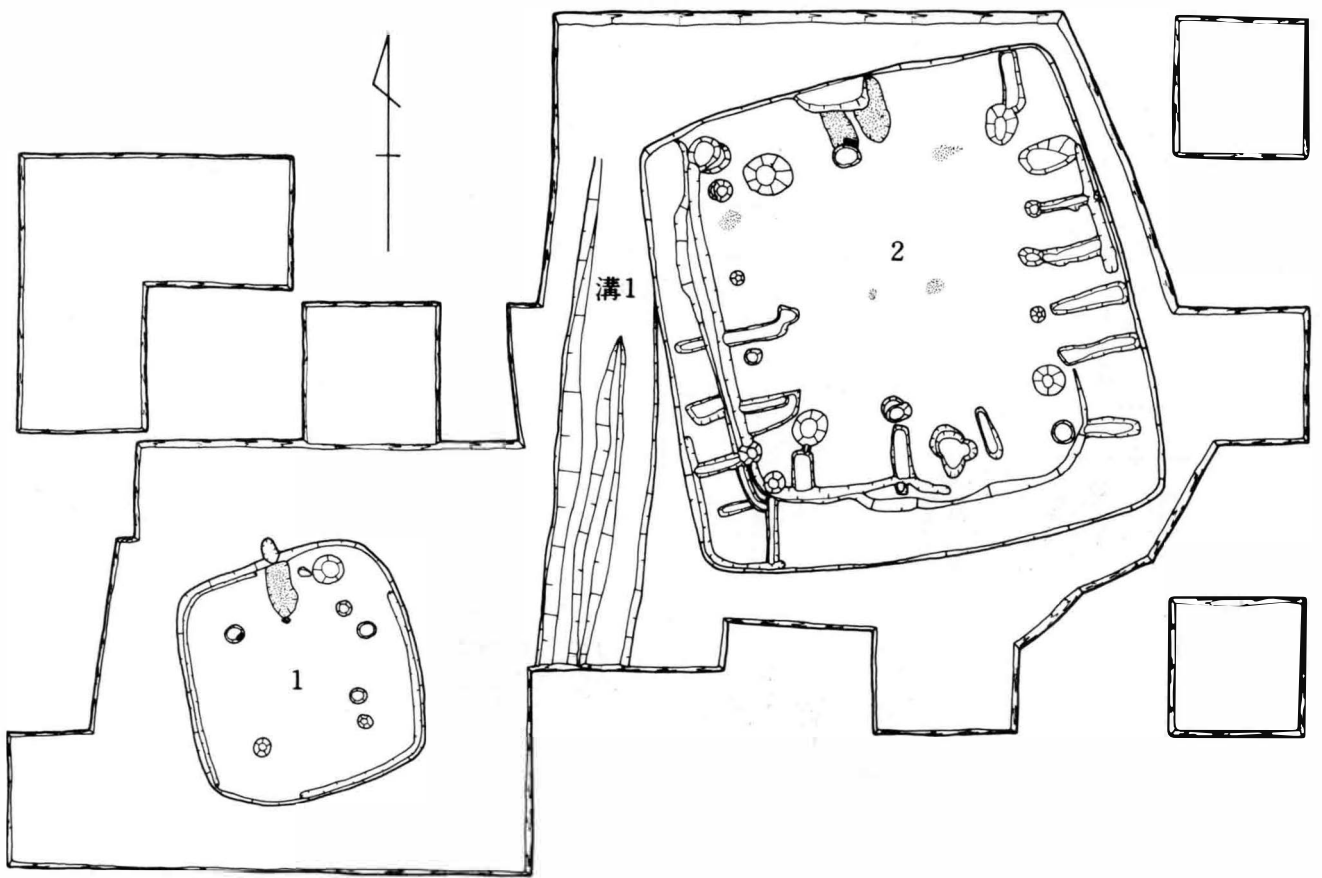


第1図 三輪遺跡(三輪小学校)周辺の主要遺跡分布図(1:20000)

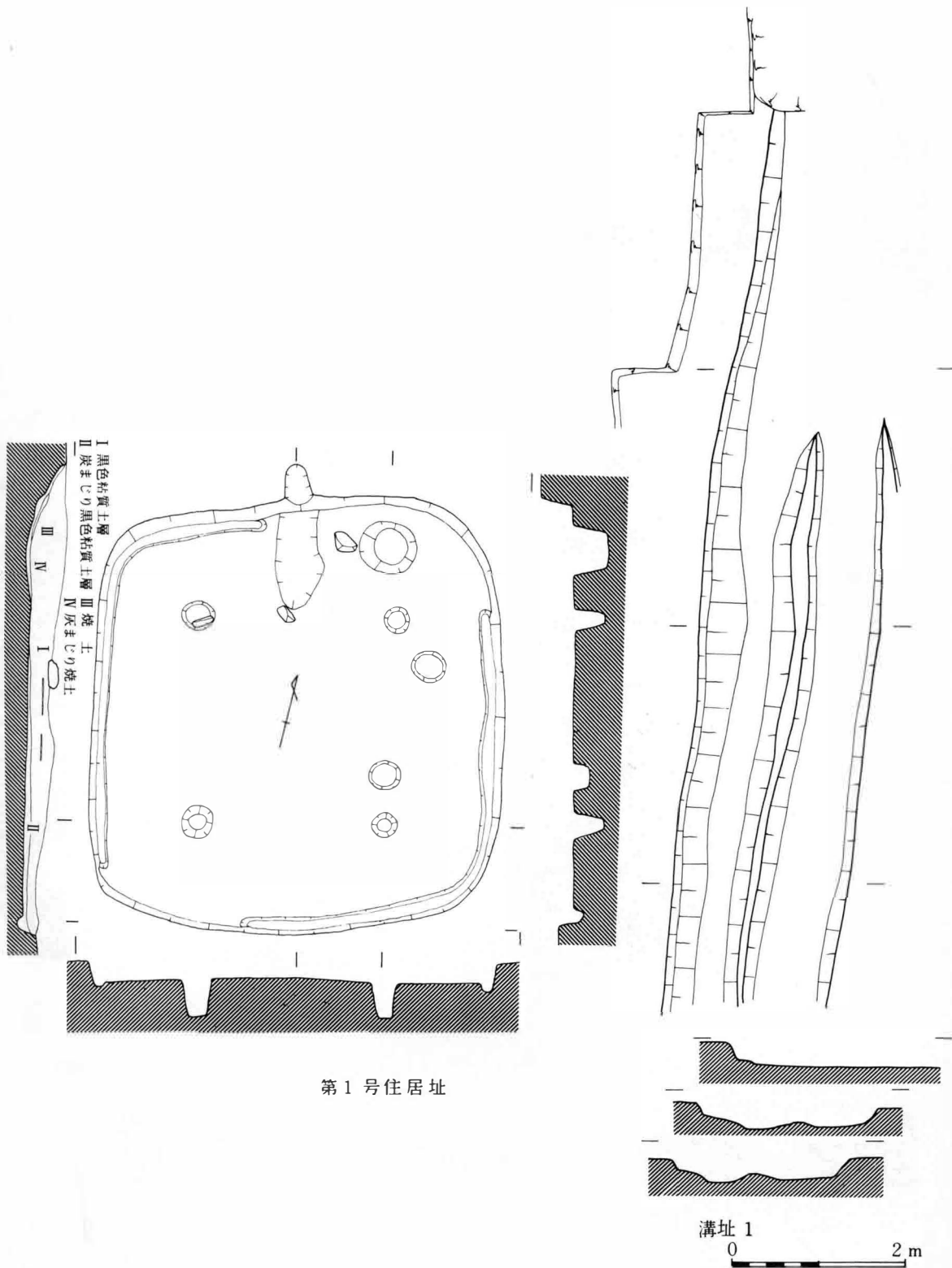
1. 三輪小学校遺跡
2. 下宇木B遺跡
3. 返目遺跡
4. 旭幼稚園遺跡
5. 国鉄車輛基地遺跡
6. 吉田高校グランド遺跡
7. 湯谷遺跡
8. 浅川スタンド遺跡
9. 神楽橋遺跡(北部中学校遺跡)
10. 浅川西条遺跡
11. 県主塚古墳
12. 地附山前方後円墳・上池ノ平古墳群
13. 駒形岳車山平古墳群
14. 滝上山古墳群
15. 湯谷古墳群



第2図 調査地及び遺構分布図 (1:500)

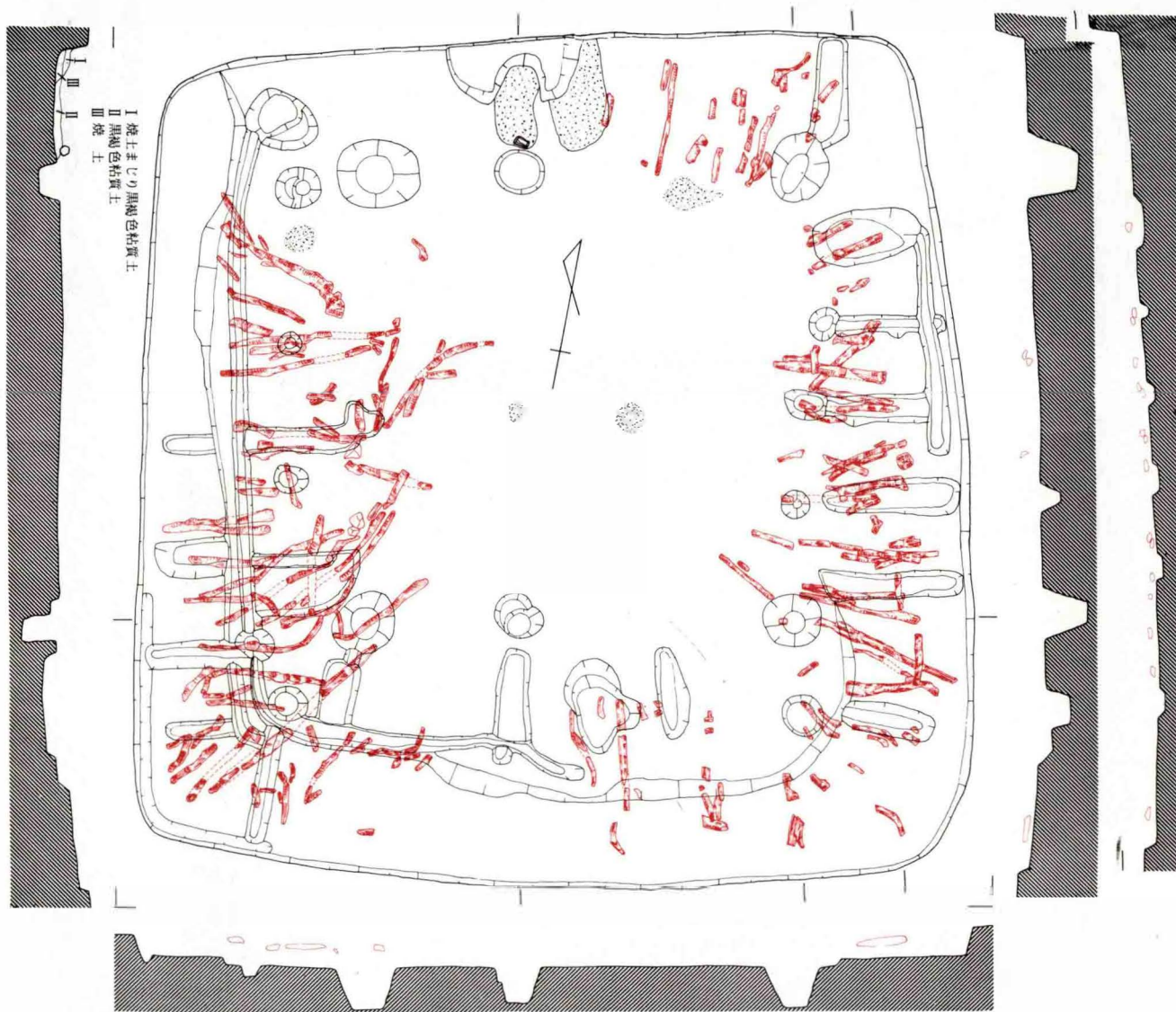


第3図 第1次調査遺構分布図 (1:160)

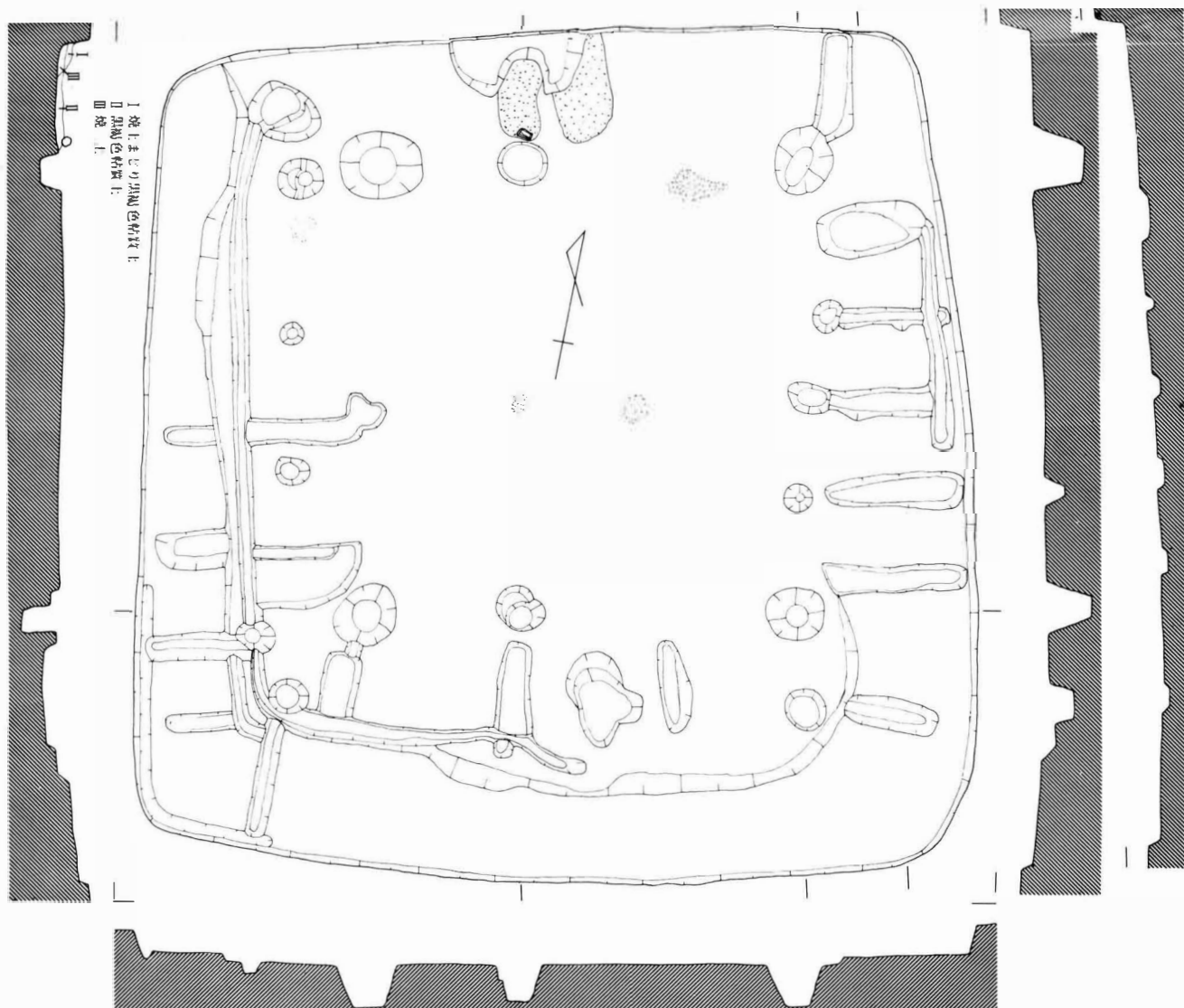


第1号住居址

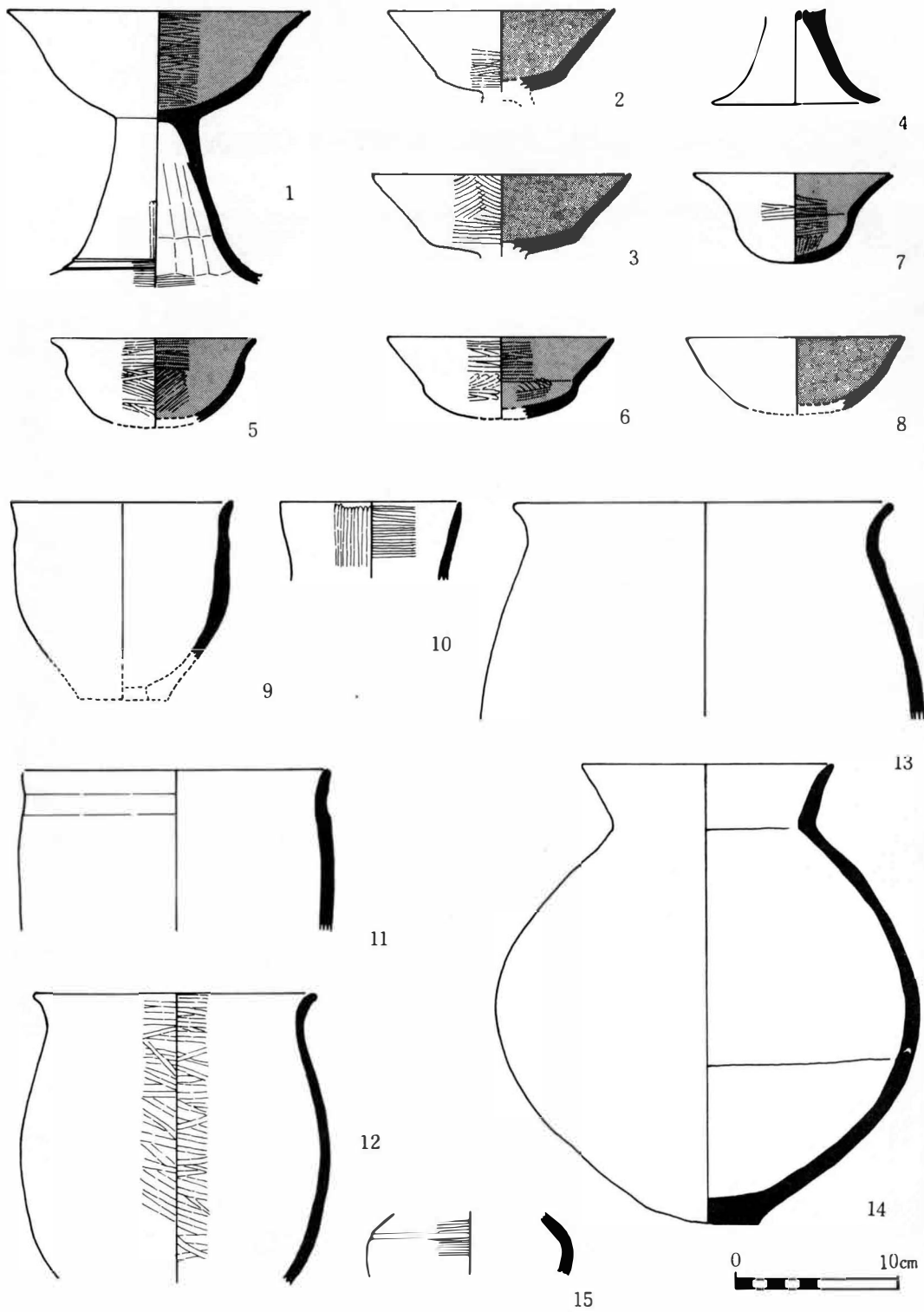
第4図 第1号住居址、溝址1実測図 (1:80)



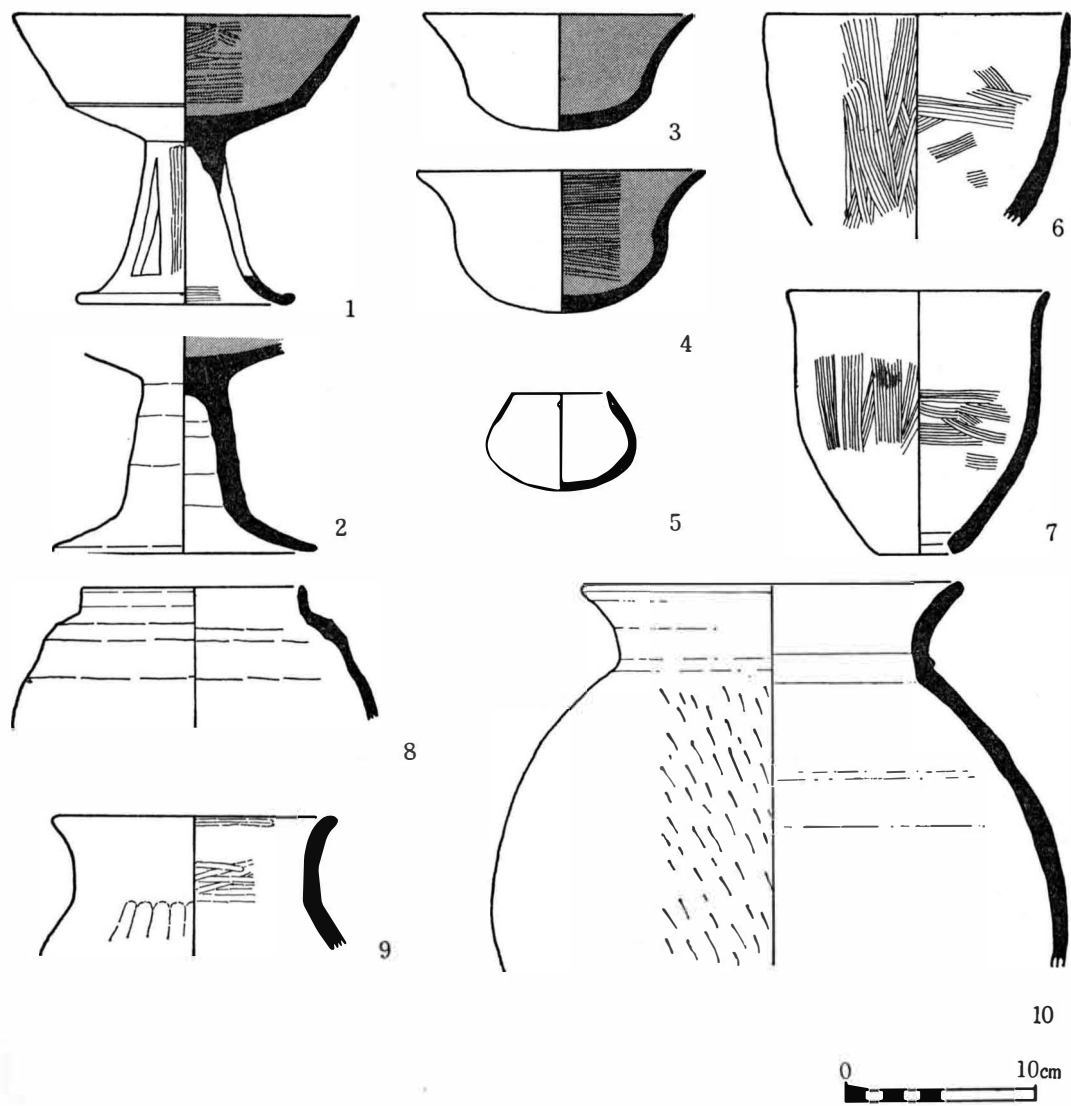
第5図 第2号住居址炭化物出土状態実測図(1:80)



第6图 第2号住居址实测图 (1:80)



第7图 第1号住居址出土土器(1:4)



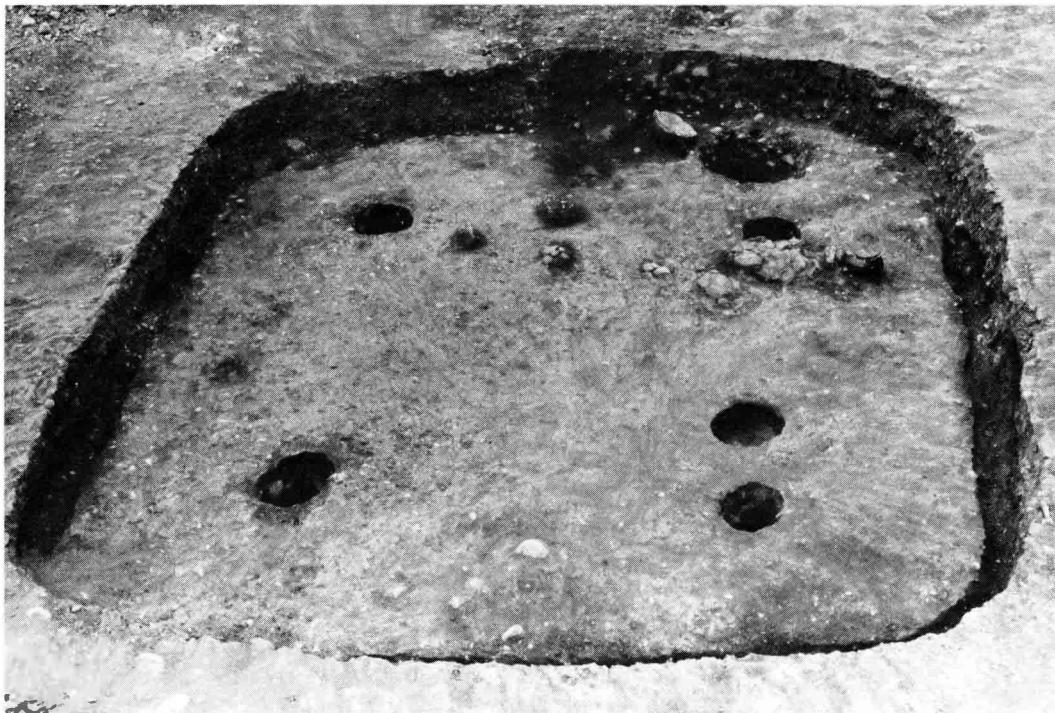
第8图 第2号住居址出土土器



1. 三輪小学校遺跡遠景



2. 第一次調査地近景



第1号住居址



同遺物出土状態



第2号住居址炭化材残存状態（東より）



同（北東より）



第2号住居址炭化材残存状態（西壁付近・北より）



同（東壁付近・北より）



第2号住居址



第1・2号住居址及び溝址1



第2号住居址溝状遺構



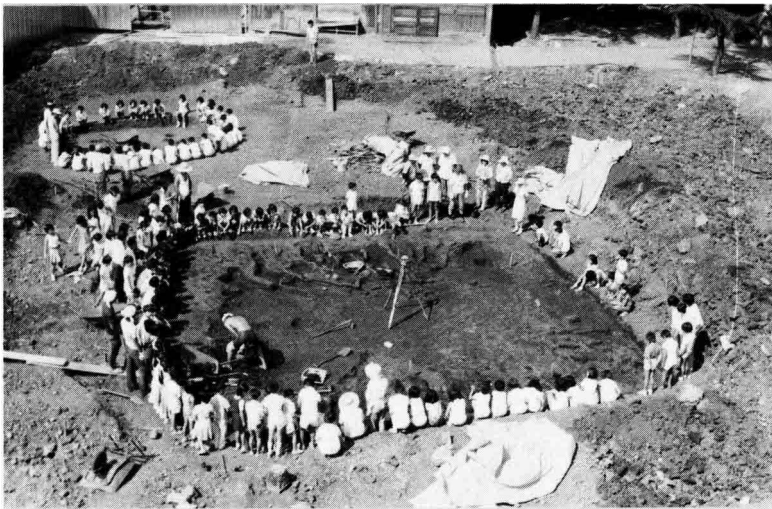
溝址 1



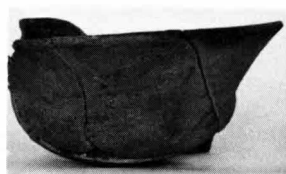
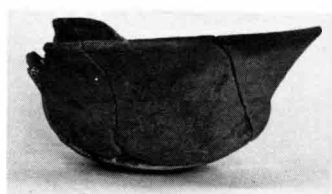
調査



調査



第九图版 第一·二号住居址出土土器



第4章 第2次調査

第1節 調査の経過

1. 調査日誌

7月25日 米山調査団長，横山教育次長参加による結団式を行い，小林孚調査主任の調査方針の話の後，ブルトーザーによる削平地の残土処理より調査を開始する。この作業と併行し，東西にアルファベットで，南北にアラビア数字を配するグリットを設定する。

7月25～29日 昨日に引き続き，郷土史関係高校クラブ員，三輪小学校PTA会員の協力により，残土処理及びグリット調査にかかる。調査地北半分以上は校舎建設時に削平されたためか，又は浅川の氾濫による押し出しによったのか，確認面では小礫を含む砂利層であり，遺構の存在は認められなかった。そのため，層位を確認するために東西に土層観察用トレンチを設定する。調査地南半分には数軒の住居址が複雑に重複している模様で，それに溝址と後世の攪乱があり，プランの確認が容易でない。出土遺物は第3号住居址付近より集中出土があった他，平安時代・古墳時代のものが多く出土するが，その量はあまり多くない。

7月30～8月12日 遺構プランと各住居址の新旧関係把握のため全力を上げるも，時節柄の日照により土色の一体化が，判断に困難を極める。時々慈悲的雷雨とジョロによる人工降雨により，遅々たる遺構プランの判別をする。この調査により新旧関係及び発見順に住居址番号を付する。住居址番号は第1次調査に引き続き第3号から用いることにし，第9号住居址までを付し，溝址も同様に3～5まで付した。調査は先に発見された第3号住居址の精査と新旧を考えながら新しいものから逐次調査にかかる。遺構のほとんどは校庭にかかり全容を知り得るものは第8号住居址のみである。遺物は住居址出土のものがほとんどで，包含層のものが少ない。この間，検出順に実測・写真撮影を行い随時調査を進める。

8月13・14日 検出遺構の検討と併行しながら，実測作業を行う。

8月15日 盆休み。

8月16日 実測作業を行う。

8月17日 実測作業と併行し，一部発掘器材の撤収を行う。

8月18日 調査を完了し，残務整理をする。

本調査は四ツ屋（清野小学校）遺跡との同時調査であり，複雑な地層と調査員の割愛をもっ

て実施したため、当初計画期間内に終了しなかった点、今後の調査の教訓にしたい。

2. 調査会（団）の編成

調査会長 中村博二（長野市教育委員会教育長）

調査団長 米山一政（日本考古学協会々員・長野市文化財保護審議会会長）

〳 主任 小林 孚（ 〳 〳 須坂高校教諭）

調 査 員 原田勝美（長野県考古学会々員・長野市役所）

〳 唐木孝雄（ 〳 〳 津和小教諭）

〳 佐藤信之（ 〳 〳 立正大学生）

〳 岩佐哲夫（ 〳 〳 信大学生）

〳 鳥羽英継（ 〳 〳 〳 〳 ）

〳 小平和夫（ 〳 〳 〳 〳 ）

〳 原 明芳（ 〳 〳 〳 〳 ）

事務局長 丸山喜正（社会教育課長）

担当局員 松橋 順（ 〳 〳 補佐）

〳 内田早苗（ 〳 〳 文化財係長）

〳 矢口忠良（ 〳 〳 〳 主事）

3. 調査参加者一覧

P T A 佐藤一郎・肥田ミユキ・新井正雄・伝田晶・上野・藤森秀也・清水・小野礼子・中平幸子・根本文及・高相・西沢・大屋康子・原山百合・中村かずみ・塚田孝子・塚田令江・小山寿美子・靱内喜代子・児玉・竹田房恵・小林良子・中野智子・松木郁子・多田章子・杉浦勇子・富田ます子・上松末子・千野よし子・割田マサコ・蜂谷すみ子・小林秀子・西沢伊智子・木谷・新井・伝田・西沢・甘利登紀子・金太・田中・中村・西沢・志賀・田中あさ子・青木・石坂・塚田・原山・土屋・川上・中田・高梨・北条・金子・福田・酒井・宮之内・根岸道子・相田加代子・鈴木宏子・中沢・森田・中野・北原スミエ・日向野昌子・青木・丸山・木内・吉岡加子・松木一彰・松木とき子・小山れい子・高山伸秀・増田・小林・三輪光子・杉浦哲夫・石井義一・岡沢暢彦・荒井薫・霜田芳吉・吉沢明美・田中修子・青木美智代・杉浦照代・中村正志・霜田幸子・小林袈裟一・鈴木幸子・宮崎信子・荒井やす子・石井徳子・荒井智江・野沢順子・小林敏子・山田幸子・小山田利子・西沢・相沢・白沢・中平（会長小林袈裟一）

須坂高校郷土部 小田切徹男・綿田弘美・小出悦子・原田ます恵・湯本好美・望月映・東山託也・青木貞波・小林修（顧問小林孚）

長野西高校地歴班 松橋敏子・笠井美江・高橋美保子・荻原妙子・柄沢なほ美・黒岩操・正木美恵・柳沢智子・中沢恭子・中沢千寿子（顧問 東福寺利雄）

吉田高校地歴班 馬島浩夫・山際正己・池田久恵・片山浩誠・原田克己・春原弘子・滝沢章敏・山岸理・倉科明・竹内久・伊藤貴重・村上一成・宮下恵一・宮沢正・小池悟・荒井宏治・碓井将啓・清水和彦・棚田俊雄・成田重治・大津光広・秋山裕希・堀川京太・大島誠一・樋口浩之・大久保龍哉・原田健次・榎内義人・鳥居伸行・北沢隆志・山本浩明・松本晃・柳沢克範・竹村忠彦・寺島孝司・笹沢豊明・鈴木義一・諸野脇幸昌・藤森秀泰・関高史・友野範久・高橋義彦・中村克規・西沢悟・竹村剛志・北村豊・倉島明・蔵之内充・黒岩典彦・大久保元親・善財伸・村上俊幸・千野茂・田畑良子・井踏恵里・清水順子・小林一徳・近藤正・加藤修二・鶴見隆夫・児玉純・宮下正明・吉沢睦博・小山拡・原田泰・海沼章久・滝沢信・小林喜久・花岡朗・岡沢晴也・稲田高規・北村宏・早川利浩・鈴木信一・山寺信一・坂本浩・山口宗之・中沢庸光・小池晃・桐山昭夫・佐藤宏・菅原崇志・山田尚伸・竹村昇・春原良男・篠原宏史・吉沢功智・吉川和彦（顧問鈴木宏）（事務局）

第2節 遺構と遺物(第9図)

第2次調査に於いて検出された遺構は住居址7軒，溝址3ヶ所である。住居址には重複するものが多く，調査区南半より検出されている。単独で検出をみたものは第8号住居址のみである。溝址は，2のみ規模が大きく，溝としての性格を有するが，3・4については規模も小さく，性格は全く不明である。遺構は礫を含む暗褐色砂質粘土層を掘込んだものである。遺物は該期の遺跡としては出土量も少なく，坏形土器・甕形土器が主体の出土である。いずれも破片の出土で完形品を見ることができなかった。時期は鬼高Ⅱ期及び国分期に位置づけられよう。

1. 第3号住居址（第10・12図，第11・16図版）

遺構 調査区域内のはぼ中央で，第5号住居址・第7号住居址の上層位で確認されたものであるが，前述の浅川の氾濫の影響のため明確にプランを握むことができなかった。床面と思われる一部分が堅く踏み固められていた。規模は調査地内検出の住居址では小さなものと思われる。遺物は床面より検出された。

遺物 出土量は少ない。床面に図示した鏝釜形土器の他甕・坏形土器が集中して認められたが，図示できるものはない。甕・坏形土器はロクロ成（整）形痕を残し，坏形土器底部に糸切り痕がある。

2. 第4号住居址（第10・12・13図，第11・16図版）

遺構 調査区東端で検出された。北壁及び東西壁の一部が検出され，南壁は調査区域外のため未確認である。プランは東壁が直線となり，北西壁はやや丸味をおびた隅丸方形を呈している。西側で第5号住居址によって切られている。主軸方向はN-10°-Wを指し，規模は東西軸で7.85mを測る。壁高は北10cm，西15cm，東15cmを測る。壁面は砂質粘土層を掘りこんだため軟弱で，直に近い。床面は平坦であるが，浅川の影響により小礫が多く含まれ堅い。北壁にそって径30cm深さ16cm，径35cm深さ51cmを測る不規則に配列された2個の柱穴がある。カマドは北壁中央からやや西側に寄って構築され，粘土製両袖形で，内部に扁平角礫をたて，袖端部に遮蔽石を施し，若干の焼土と高坏片を残している。規模は主軸85cm×巾100cmである。左袖脇に床面より7cm高く段を有していた。北西隅及び西壁・東壁下に周溝が認められた。カマド右側にそって小さな落込みとなり，高坏・甕形土器が検出されている。北東隅部は攪乱により破壊されてはいるが，北東南隅部に自然石の集石があり，大小さまざまで，不規則であるが，本住居址に付属する一施設である。

遺物 遺構の規模の割合にはその出土量は少ない。器種として須恵器坏形土器の他は土師器で，碗形で口縁部が直立的又は外反する坏形土器，坏部下位の稜が不明確で脚部が筒形を呈し，袖部がラッパ状に外開する坏内面黒色処理された高坏形土器が多く目立つ。甕形土器には多種の形態で通常みられるものがあり，口縁部が外開し，球形胴に近いが，器高はあまりないものと，口縁部が直立的に立ち上がり，最大径がその部位か肩部上にある筒形を呈する体部を有するものと，体部下半に最大径があるものがある。この他に甕形土器があり，底部をそのままくり抜いた一孔を有するもの他，大形のものも多く出土している。また，体部より口縁部が直立する葉壺形土器が出土し，この住居址と攪乱との関係から後出のものであろうと考えている。須恵器坏形土器は2个体出土しており，口縁端が内傾しながら立上り，口唇部で外方に開く蓋受部をもち，体部下半よりヘラケズリを施し，中心部に至りより強いケズリとなる。蓋受端部のみに自然釉が残り，坏身と蓋と合せ焼成されたものである。

3. 第5号住居址（第10・13図，第11図版）

遺構 第4号住居址の西部を切って検出された。プランは方形で第4号住居址と同じく調査区域外のため未確認である。規模は主軸3.40mを測り，主軸方向N-80°-Wを指す。壁は直に立上り，壁高は北16cm・東11.5cm（第4号住居址の床面より），西8cmである。あまり保存が良くないため検出に困難を用した住居址である。一部に貼り床が残るが直下は第4号住居址と同じく礫が多く混入した基盤である。中央南側に柱穴，径20cm深さ6cmのものが1個あり，他に柱穴は認められなかった。西壁中央部に焼土の堆積があり，構造物は確認されなか

ったが、ほぼこの位置がカマドであることは間違いないだろう。規模は主軸で 55cm（焼土範囲）測る。土師器の甕形土器片が検出されている。

遺物 出土量は少なく、坏形土器（第13図7～13）と甕形土器（14）1点のみである。坏形土器はすべて、水引きロクロナデ仕上げで、糸切りの底をもつ。器形は斉一性があり、口縁部径が12cm～13.5cmの範囲であり、器高が3.5～4cmの範囲にある。口縁部は外方に開くが、9のみ口縁部が細く尖がり気味となり、他は丸味を帯びる。甕14は赤褐色をした小石まじりであるが焼成良好な土器である。

4. 第6号住居址（第11・14図，第13・17図版）

遺構 調査区内中央西南部で検出された住居址で、第7号住居址を切って構築されている。プランは隅丸方形を呈し、南壁は調査区外、東壁の一部は攪乱により破壊され、西壁は溝址により切られている。規模は長軸が計測できず、短軸で5.05mを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。壁は北壁で高さ42cm、東壁で（第7号住居址床面より）15cmでやや外側に開くが直に近い壁面となる。床面は平坦で、礫は混じらず比較的良好的な面である。支柱穴は北西部隅及び東北部隅にあり、前者は径30cm深さ10cm、後者は径30cm深さ11cmを測る。本調査区内で検出した住居址中で柱穴が明確に検出されたものは本住居址のみである。カマドは北壁中央にあり、石芯両袖形を呈し、主軸30cm×巾80cmの規模となる。中央上方に角礫の支脚石があり、焼土に混入し、甕形土器が検出されている。北壁東側の壁下に不整楕円形の、主軸70cm×短軸30cm×深さ8cmピットがあり、貯蔵穴と思われる。中央附近に床面に密着した扁平円形平石（長径70cm×短径40cm）があり、作業台であろう。

遺物 本住居址の出土量は少なく、図示できるものは、坏形土器（第14図1）と甕形土器（2～5）の土師器と須恵器坏形土器片のみである。土師器坏は丸底で内面黒色を呈し、ヘラヨコミガキを施す。甕形土器は、体部が球形になり中位に最大径を有する（4）のものと体部が所謂烏帽子形を呈し、長胴となるもの（2・3）及び須恵器甕の器形に影響を受けた器形で、口縁部が外方に開きながら立上り、口縁端部でさらに大きく開き、体部上方に最大径有する3種がある。甕2・3は外面をタテヘラケズリを施し、内面にヨコナデ又はハケ整形痕を残している。5は外面を丁寧なハケナデとなるが内面はヨコヘラミガキであり、やや雑となる。須恵器坏形土器片は蓋坏の身部で、口縁部が内傾しながら立ち上がり、明瞭な蓋受部を有する。底部は回転によるヘラケズリである。青灰色を呈し、焼成は良い。

5. 第7号住居址（第11図，第13図版）

遺構 第6号住居址に切られ一部重複した住居址である。調査区のほぼ中央で検出され、プランはやや不整形な隅丸方形となる。北壁及び東壁の一部のみが確認された。規模は長軸が計

測できず、短軸で5.3mを測り、主軸方向がN-13°-Wを指す。壁高は北で20cm、東で22cm、西で32cmを測り、壁面は直に近い。床面は平坦であるがやや南方向に傾斜しており軟弱である。北壁中央部に多量の焼土が検出されており、その壁外に煙道が施されている。規模は焼土の範囲より推測し長軸100cm×巾55cmで比較的大形となる。火床部はいくぶんU字状となる。カマド右側に甕形土器片が出土している。柱穴は確認されていない。

遺物 出土遺物は検出されず、表土より検出面までに若干の坏形土器片と床面より甕形土器片を検出されたのみである。

坏形土器片には内面が黒色処理されたものがあり、椀形と口縁部が外反する器形になる2種がある。甕形土器は長胴形になる。

6. 第8号住居址（第11・14図、第13・14図版）

遺構 第6・7号住居址の北側で検出された住居址で、プランは不整形な隅丸方形で、住居址中央を溝址2により切られているものの遺構の全容を握めたのは本住居址のみである。規模は南北2.6m×東西2.7mの小形な住居址である。主軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は低く、北4cm・南10cm・東7cm・西9cmを測るが、構築時のままであるとは思われない。壁面はやや外側に傾斜をもっている。床面平坦で軟弱である。カマドは溝址2により破壊されたものと思われる。

遺物 本調査区内で、ほぼ規模全体が確認できた唯一の住居址であるが、出土遺物の量は、他に同じく誠に少ない。甕形土器（第14図10）が1点、坏形土器（6～9）4点である。うち坏形土器（9）1点は須恵器で外方に張りの強い高台をもつ、青灰色をした坏である。甕形土器は、ロクロ整形痕を残し、体部上半に最大径がある。国分期における一般的な体形をなすものであろう。

7. 第9号住居址（第11図、第13図版）

遺構 調査区西端部で検出され、検出面直上まで後世による攪乱がいちじるしい状態であり検出が困難であった。

プランは全く不整形な隅丸方形となり、西壁は攪乱により破壊され、東壁は一部攪乱と溝址3によって切られている。規模は南北3.4m×東西2.65mを測り、主軸方向はほぼ南北を指す。床面は平坦であるがやや南に傾斜をする。北壁側よりに3個のピットがあり、左（第11図9号住居址内）より径50cm×深さ16cm、径50cm×深さ9cm、径30cm×深さ6cmをそれぞれ測る。遺物はまったく検出されていない。

遺物 出土遺物が少なく、ただ床面付近に小さな甕形土器片数点の出土を見たのみで図示できるにいたらない資料であった。

8. 溝址2 (第11・14図, 第14・18図版)

遺構 調査区域西で検出され, 南端より北端の調査区を縦断し, 第6号住居址及び第8号住居址を切り, 南より北に下っている。最大巾が1.10m, 最少巾で70cmとなる, 深さは最も深いところで38cm, 浅いところで16cmを測り, U字状を呈する。本調査地では最も新しい遺構であろう。

遺物 本溝址より, 2点の土師器坏形土器のみが出土している。出土遺物が誠に僅かである。

9. 溝址3 (第11・14図, 第14・18図版)

遺構 溝址2よりさらに西側より検出され, 溝南端を攪乱により破壊されている。U字状を呈し, 巾40cmで深さは最深27cm, 最浅で16cmを測る。南より北に下り, 第9号住居址を切っている。本溝の北端が第8号住居址西壁外側中央部で終り, 南端部は第9号住居址東壁の攪乱の内を終るものと思われる。その長さは12m以内であろう。溝の性格は全く不明である。

遺物 溝上方から西壁に密着して, 落ち込むような出土状態のものと, 溝底から完形及びそれに近い形態の土師器(第14図12)と須恵器(11・13・14)の坏形土器が出土したのみである。ともにロクロ水引き成形で, 底部に糸切り痕を残す。

10. 溝址4 (第11図)

遺構 調査区南西隅寄りで検出した。西から東に下り, 巾20cm, 深さ11cmを測る。一部分が平面で円形状に開がりを持ち, 溝址2により切られている。遺物は伴わず時期不明である。

遺物 出土遺物はなかった。

11. グリット出土遺物 (第15・16図, 第18図版)

グリットから出土遺物は, ロクロ水引き成(整)形され, 底部に糸切り痕を有する坏形土器及び甕形土器を中心として出土している。その出土地も, B-8・9・10グリットを中心に出土しており, 住居址の可能性もあるが, 黒色土層からの出土であり, そして集中して出土することがなかったためと遺構が存していても, 上部が流失されてしまったためか, 落ち込みを確認することができなかったためグリット出土の遺物としてあつかった。坏形土器(第16図)はそのほとんどが土師器であるが, 須恵器(10~22)が混じる。1は古墳時代に比定されるものである他は同一期のものと思われる, 口径に比して底径及び器高の数値が小さく, 浅い坏

形土器である。8・15には高台が付され、内面黒色処理され、図示したとおり不規則な暗文を有する。1を除き他の底部に糸切り痕を残す。甕形土器には土師器（第16図1～5・7）と須恵器（6・8）がある。土師器には大・小2種あり、ともに最大径が口縁部又は肩部上部にあり、体部上半にはロクロ整形痕を残す。体部下半はナデ整形によるが、7には格子叩き目痕がある。須恵器には大形甕形土器の口縁部と体部が出土しており、8には体部上方まで細かい格子叩き目痕がある。この他灰釉壺形土器肩部付近の破片が1点出土している。（原田勝美）

第3号住居址 (第12図)

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	罎釜		22.3		口縁が直立	ロクロナデ	砂、小石まじり	良好	赤褐色	赤褐色	床 面
2	〃		21.4		口縁がやや内傾	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃

第4号住居址 (第12・13図)

3	高坏			14.1	脚部がややふくらむ	ヨコナデ	砂まじり	良好	赤褐色	黒 色	カマド
4	坏	4.7	12.4		丸底 口縁がほぼ直立	ヘラナデ ヨコヘラケズリ	〃	〃	灰褐色	灰褐色	床 面
5	〃	4.8	14.8		丸底 底部より開く	ヨコナデ ヘラケズリ	〃	〃	赤褐色	黒 色	〃
6	〃	4.4	11.8		丸底 底部ちかくよりたちあがる	ヨコナデ ヘラケズリ	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
7	〃		10.2		蓋うけがつく 口縁がやや内弯	ロクロナデ	〃	〃	灰青色	灰青色	覆 土
8	〃	5.7	12.6	14.5	口縁部が立つ、蓋うけがつく 底部平底	ロクロ整形・ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	床 面
9	甕	15.6	15.7	5.3	球形の胴 口縁が頸部より外反	ヨコナデ ナナメのヘラケズリ	小石まじり	〃	赤褐色	赤褐色	カマド
10	〃		15.1		口縁に最大径をもつ	ヘラナデ ヨコナデ ナナメの刷毛状工具による整形	〃	不良	〃	〃	〃
11	〃	24.9	19.6	5.5	底部より口縁に直立 口縁がやや外開き 烏帽子形	ヨコナデ ヘラケズリ 刷毛状工具による整形	〃	良好	灰褐色	〃	〃
12	〃			8.6	下半部に最大径をもつ	ヘラナデ ヨコナデ	〃	〃	〃	灰褐色	〃
1	〃		18.2		烏帽子形 口縁が外反	ヘラケズリ ヨコナデ	〃	不良	〃	〃	〃
2	〃		15.7		烏帽子形 口縁が外反	ヘラケズリ ヨコナデ	〃	〃	〃	〃	〃
3	壺		11.7		口縁が直立	ヨコナデ	砂まじり	良好	暗褐色	暗褐色	床 面
4	甌		15.6		やや口縁が直立	8本の刷毛状工具による整形 ヨコナデ	小石まじり	不良	灰褐色	灰褐色	〃
5	〃			5.4	丸味をもって底部に	ヘラケズリ ヨコナデ	〃	〃	〃	〃	覆 土
6	〃			8.6	直線的に底部に	ヘラケズリ・ヘラナデ 刷毛状工具による整形	〃	〃	〃	〃	〃

第5号住居址(第13図)

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外面	内面	
7	坏	4.1	13.1	6.0	坏形	ロクロナデ・糸切り	砂まじり	良好	灰褐色	灰褐色	床
8	〃	3.7	11.6	5.6	〃	〃	〃	〃	灰白色	灰白色	〃
9	〃	3.9	13.4	5.8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	3.6	13.6	6.5	〃	〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
11	〃	3.5	12.4	6.9	〃	〃	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
12	〃	3.4	13.6	5.4	〃	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
13	〃	3.8	13.1	4.9	〃	〃	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
14	甕		27.4		口縁がやや外反	ロクロナデ	小石まじり	不良	灰褐色	灰褐色	〃

第6号住居址(第14図)

1	坏	6.5	16.3		丸底・口縁が大きく外反	ヘラミガキ・ヨコナデ	砂まじり	良好	灰褐色	黒色	床
2	甕		17.6		烏帽子形・口縁が外開	ヘラケズリ・ヨコナデ	小石まじり	〃	〃	灰褐色	カマ
3	〃		20.1		烏帽子形・口縁が大きく外開	ヘラケズリ・ヨコナデ 刷毛状工具による整形	〃	不良	暗褐色	〃	床
4	〃	11.2	14.1	6.6	器高が低い・球胴	ヨコナデ	〃	〃	灰白色	灰白色	〃
5	〃		17.2		口縁が直立	刷毛状工具による整形・ヨコナデ	〃	良好	赤褐色	赤褐色	〃

第8号住居址(第14図)

6	坏	3.8	9.6	4.0	坏形	ロクロナデ・糸切り	砂まじり	良好	乳白色	乳白色	床
7	〃	3.1	16.2	4.6	〃	〃	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
8	〃	3.0	12.1	4.8	〃	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	覆
9	〃	4.1	10.1	4.6	高台付 坏形	〃	〃	〃	緑灰色	緑灰色	〃

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
10	甕		24.6		口縁に段	ロクロナデ	小石まじり	良好	灰褐色	灰褐色	覆土

溝址2 (第14図)

11	坏	3.1	11.6	4.6	坏形	ロクロナデ・糸切り	砂まじり	良好	灰青色	灰青色	覆土
12	〃	3.0	11.3	2.4	〃	〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃

溝址3 (第14図)

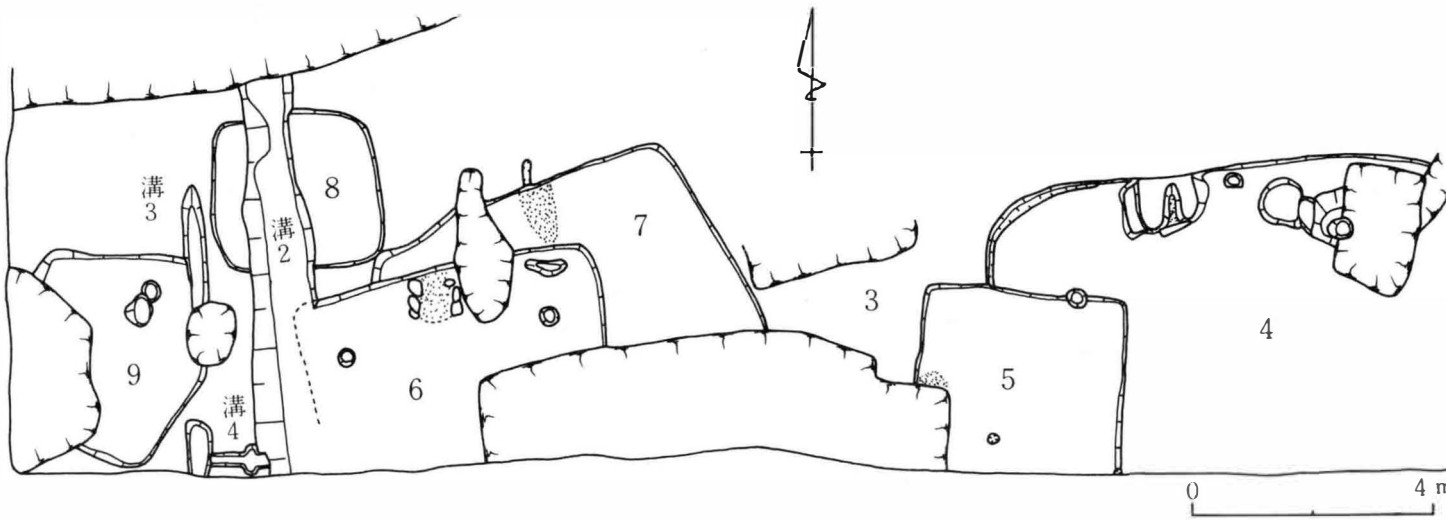
13	坏	3.9	12.6	5.4	坏形	ロクロナデ・糸切り	砂まじり	良好	青灰色	青灰色	覆土
14	〃	4.0	12.6	5.3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
15	〃	5.1	14.4	4.4	〃	〃	〃	〃	灰褐色	黒色	〃
16	〃	4.4	14.3	4.8	〃	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃

その他の遺物 (第15・16図)

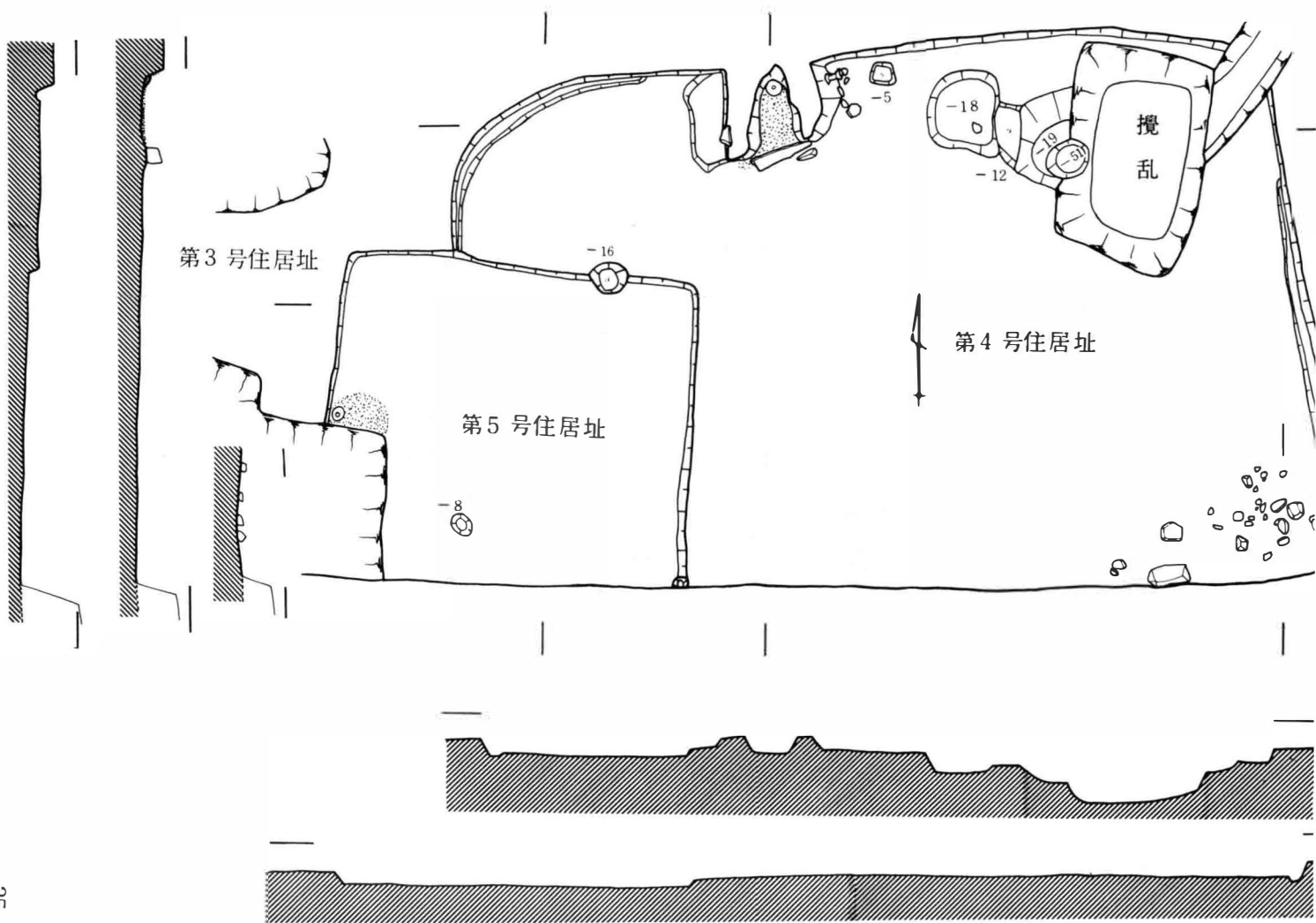
1	甕		24.7		口縁がやや外開・鳥帽子形	ロクロナデ (タタキメのち)・カキメ	小石まじり	良好	赤褐色	灰褐色	
2	〃		24.8		口縁が直線的・鳥帽子形	ロクロナデ・内面指頭痕	〃	〃	灰褐色	〃	
3	〃		17.2		口縁がやや外反・鳥帽子形	ロクロナデ	〃	〃	〃	〃	
4	〃		17.4		鳥帽子形	ロクロナデ	〃	〃	〃	〃	
5	〃		21.4		〃	ロクロナデ・カキメ	〃	〃	〃	〃	
6	〃		44.1		やや外反気味	ロクロナデ	砂まじり	〃	青灰色	灰青色	
7	〃		14.7		口縁が直立・体部直線的	タタキ・ヘラケズリロクロナデ	〃	〃	〃	青灰色	
8	〃				ややふくらむ	ロクロナデ	〃	〃	〃	〃	
9	壺				体部がふくらむ		〃	〃	乳灰色	灰白色	

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	坏	5.1	14.2		坏形	ヘラミガキ ヘラナデ	砂まじり	良好	灰褐色	灰褐色	
2	〃	3.2	12.1	4.9	碗形	ロクロナデ・糸切り	〃	〃	〃	〃	
3	〃	3.0	10.9	5.1	坏形	〃	〃	〃	〃	灰茶色	
4	〃	3.6	11.9	5.0	〃	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
5	〃	3.9	10.5	5.0	〃	〃	〃	〃	〃	灰褐色	
6	〃	3.8	12.1	5.1	碗形	〃	〃	〃	〃	〃	
7	〃	3.1	11.2	4.8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
8	〃		13.3		〃	高台付 ロクロナデ・糸切り	〃	〃	〃	黒色	
9	〃	3.6	12.5	5.3	坏形	ロクロナデ・糸切り	〃	〃	乳白色	乳白色	
10	〃	3.1	11.6	4.8	碗形	〃	〃	〃	灰茶色	灰茶色	
11	〃	3.4	12.2	5.2	坏形	〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	
12	〃	3.5	10.9	5.3	碗形	〃	〃	〃	乳褐色	乳白色	
13	〃	3.4	11.1	4.7	〃	〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	
14	〃	3.1	11.3	4.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
15	〃	6.2	13.8	6.0	〃	高台付・ロクロナデ・糸切り	〃	〃	乳白色	内黒	
16	〃	3.1	12.1	5.4	坏形	ロクロナデ・糸切り	〃	〃	灰褐色	灰褐色	
17	〃	3.8	12.3	5.6	碗形	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
18	〃	3.9	11.9	5.1	〃	〃	〃	〃	〃	灰褐色	
19	〃	3.7	12.5	5.3	坏形	〃	〃	〃	乳白色	乳白色	
20	〃	3.6	13.8	7.1	〃	〃	〃	〃	灰青色	灰青色	

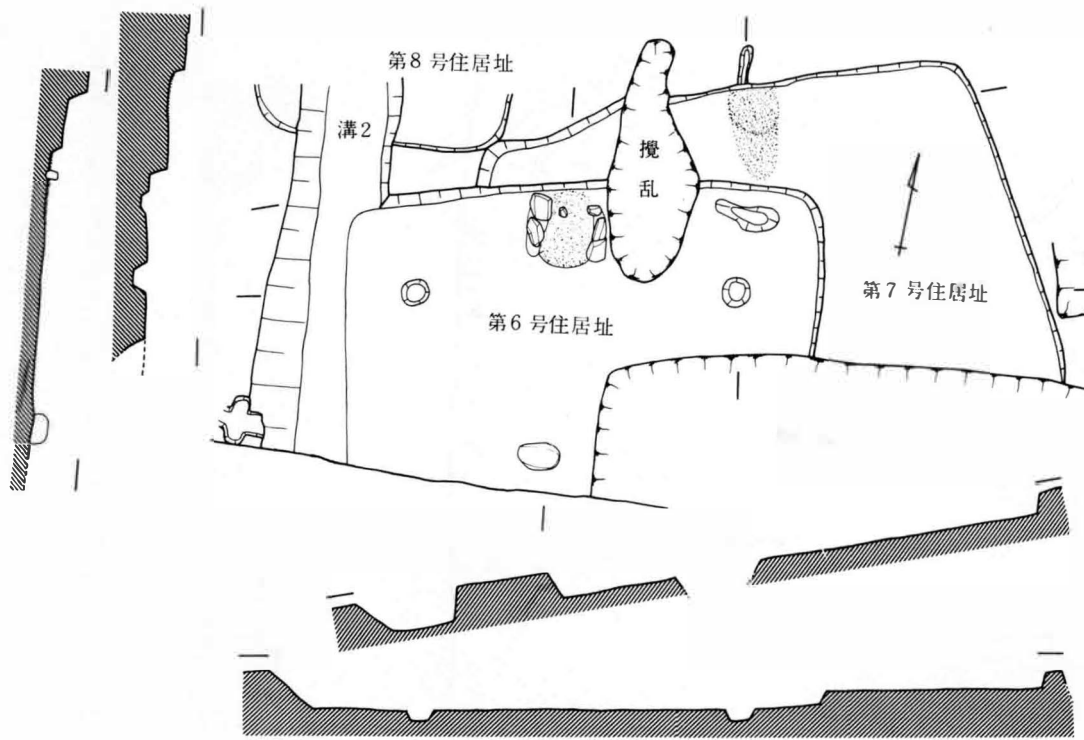
遺物 番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土 状 態
		器高	口 径	底 径					外 面	内 面	
21		3.6	13.6	5.6	杯 形	ロクロナデ・糸切り	砂まじり	良好	灰青色	灰青色	
22		3.6	12.4	6.0	々	々	々	々	々	々	



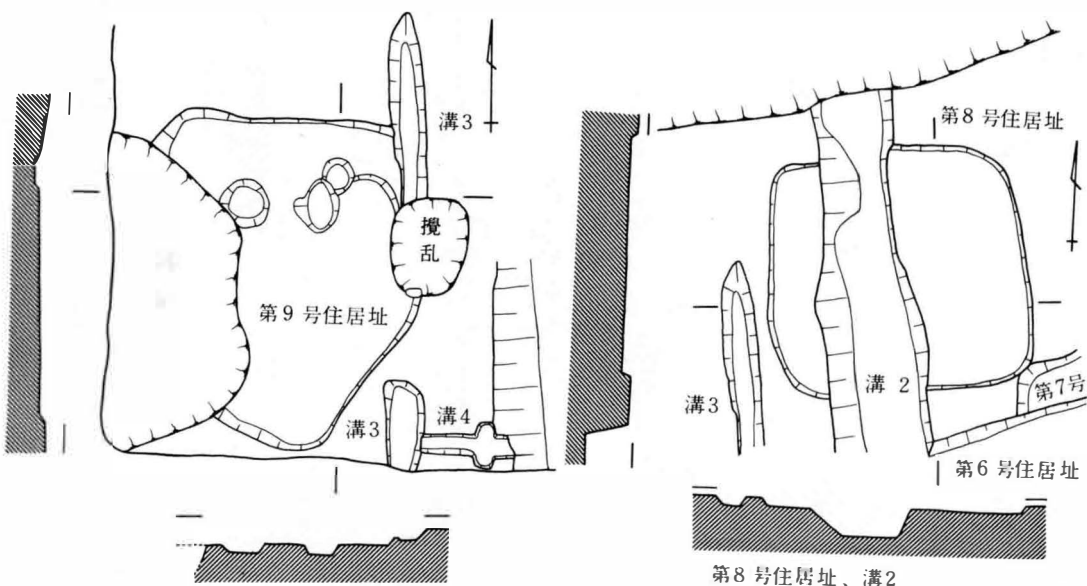
第9図 第2次調査遺構分布図 (1:160)



第10图 第3~5号住居址实测图 (1:80)



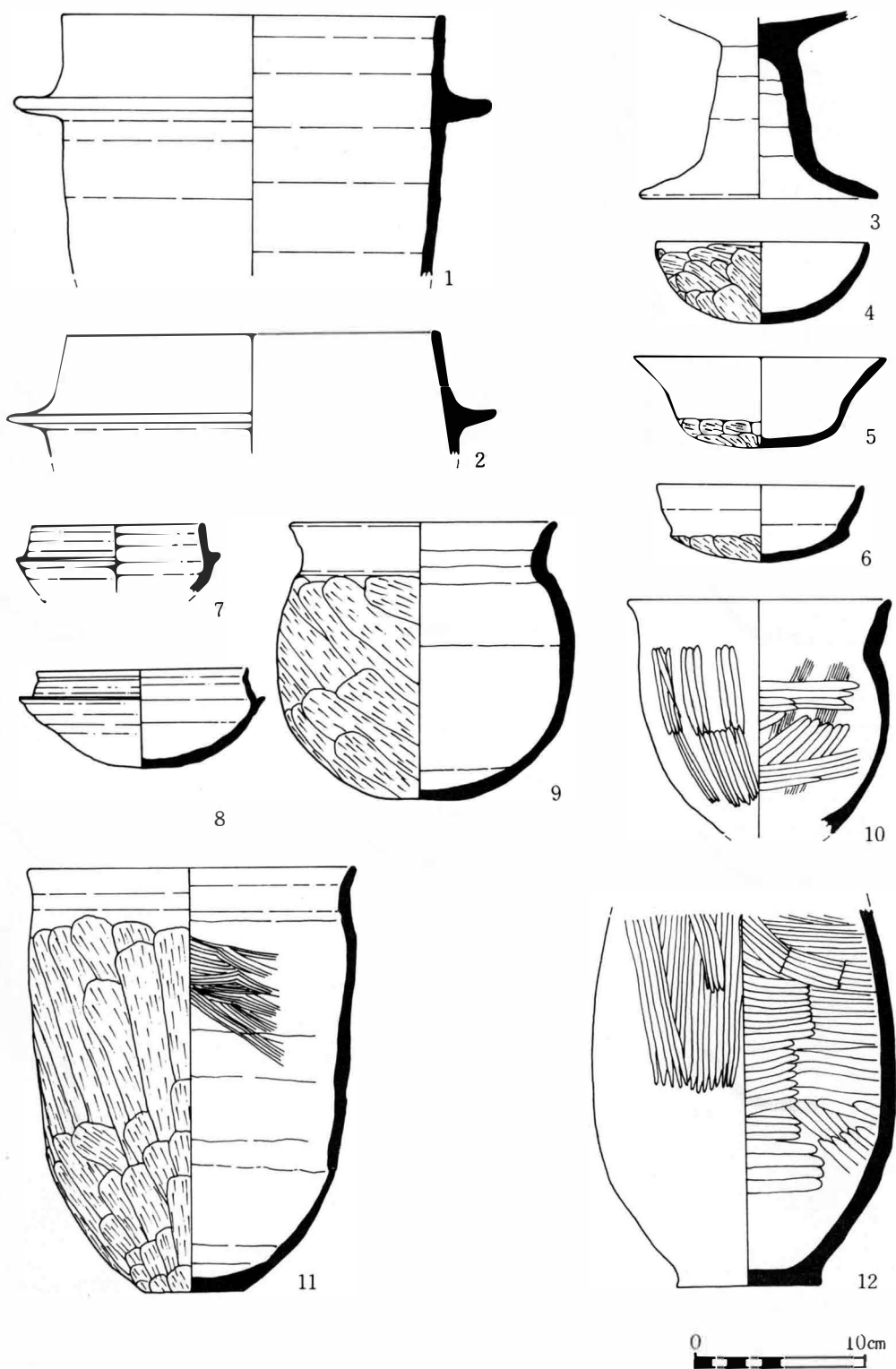
第6·7号住居址



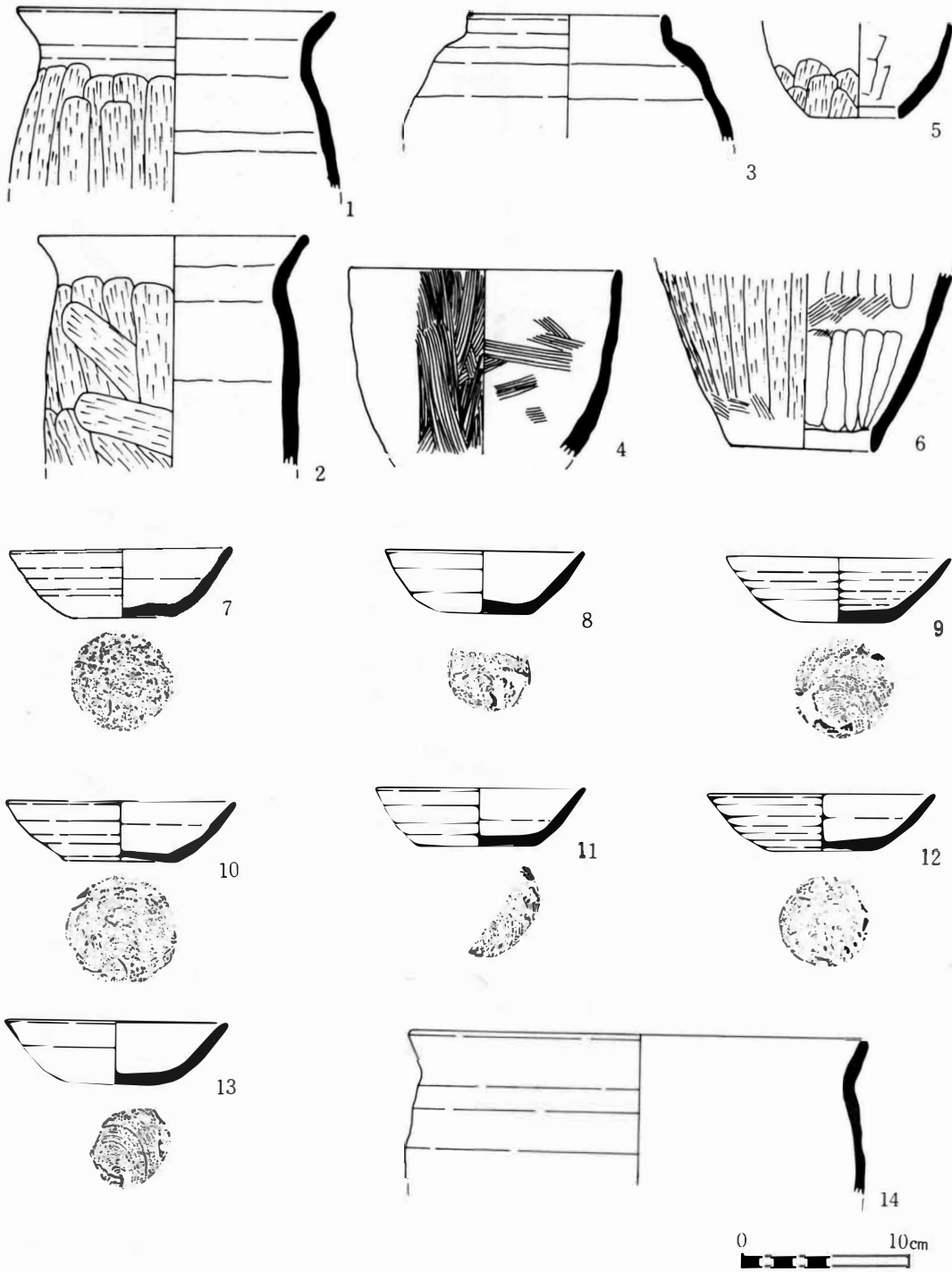
第9号住居址、沟3·4

第8号住居址、沟2

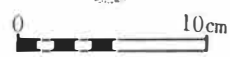
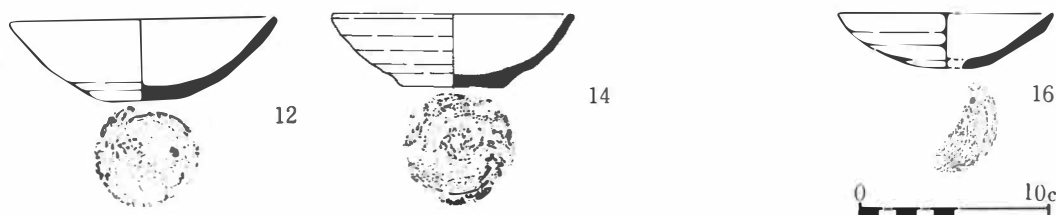
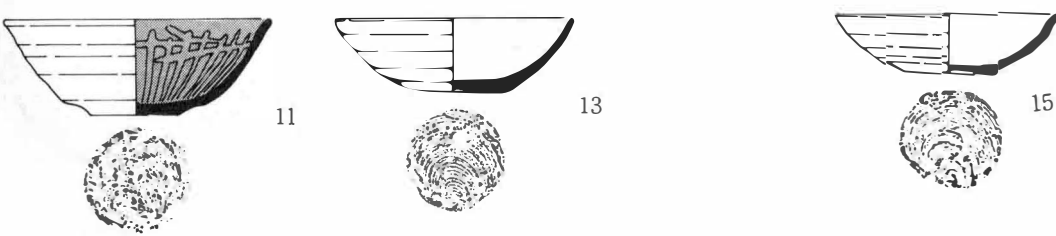
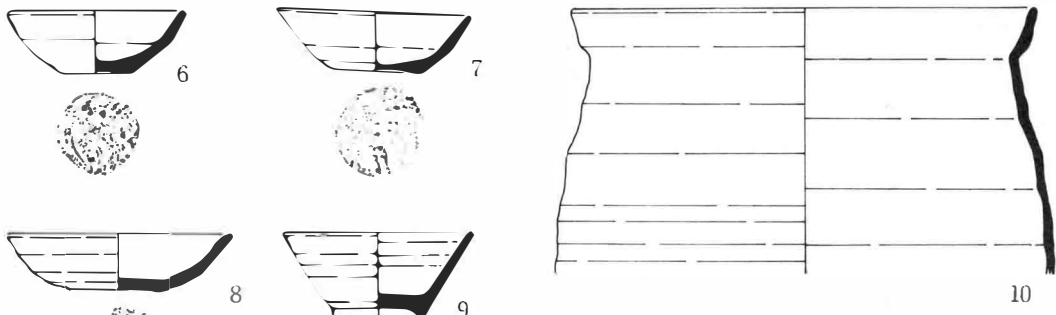
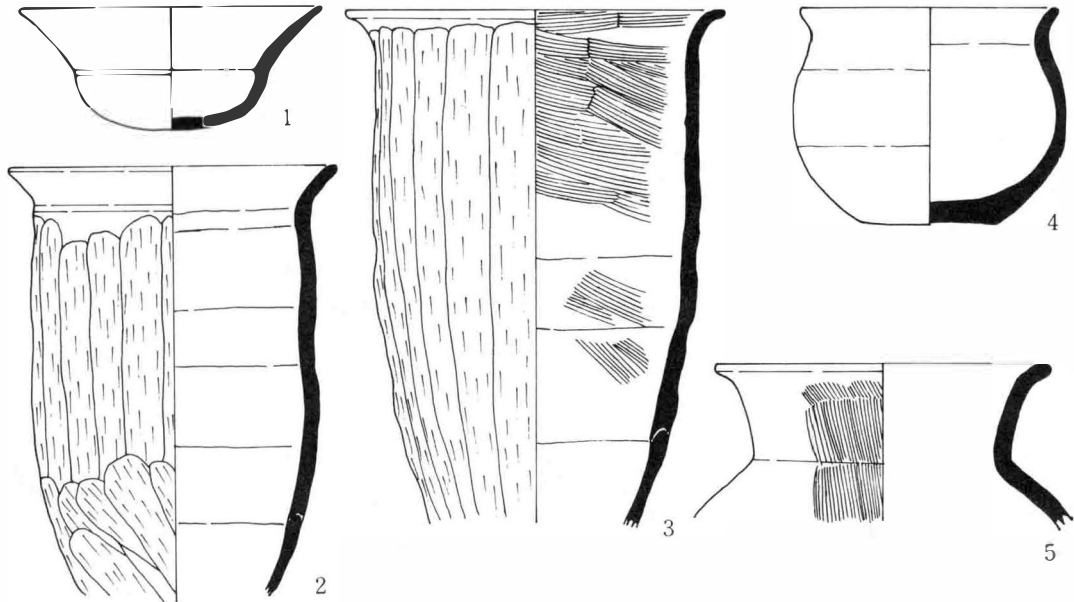
第11图 第6~9号住居址、沟2~4实测图(1:80)



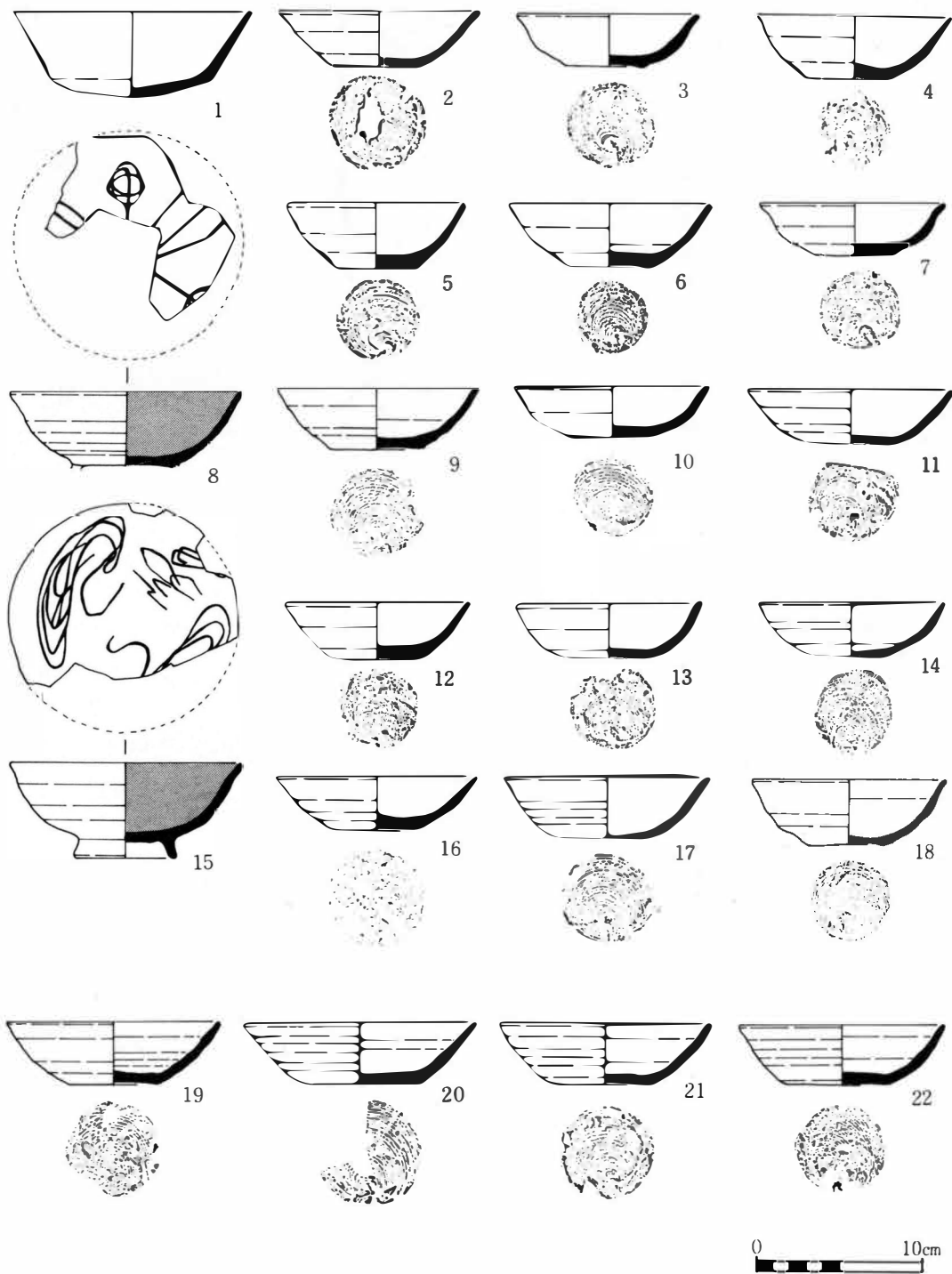
第12図 第3号(1~2) 第4号(3~12) 住居址出土土器(1:4)



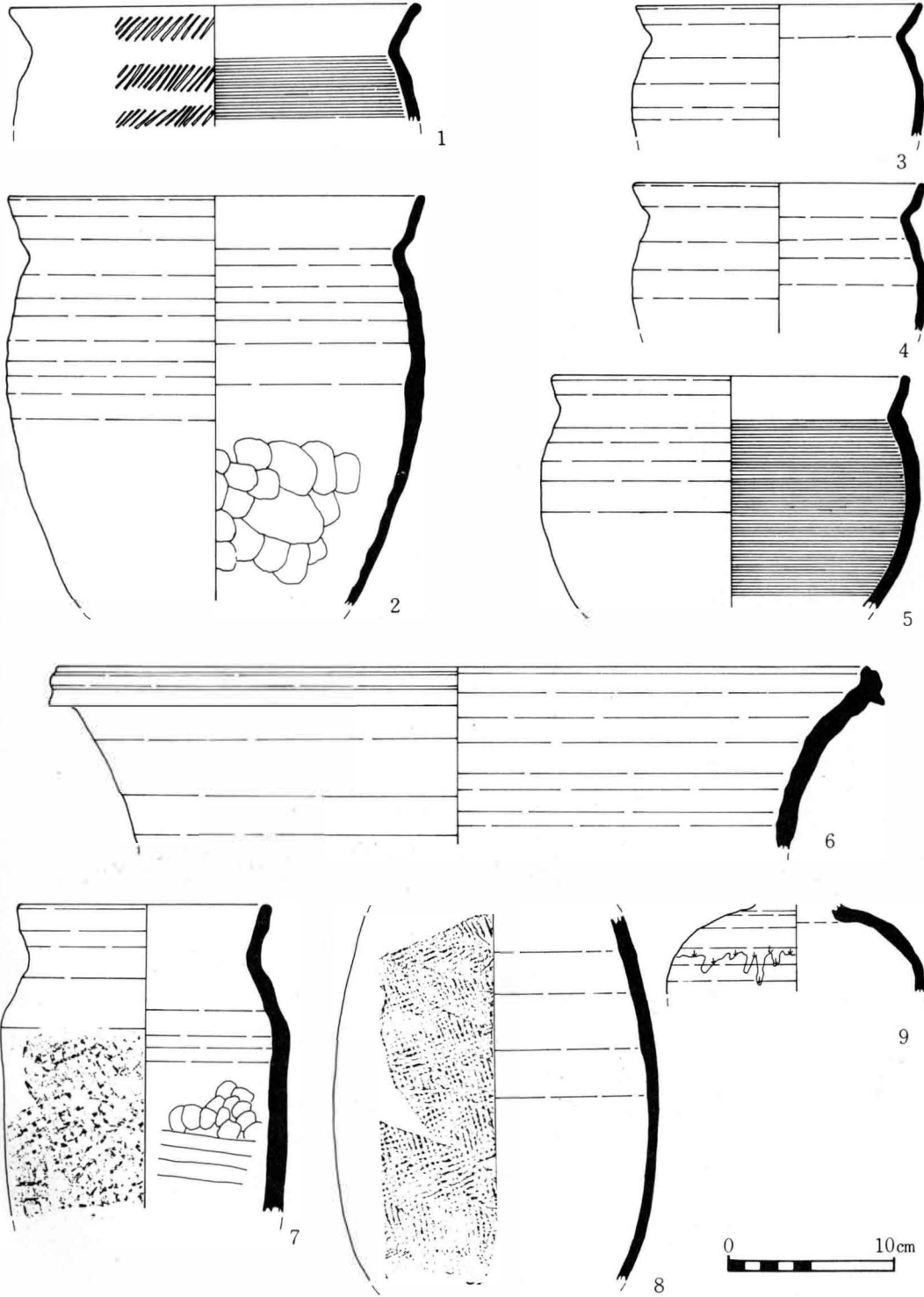
第13図 第4号(1~6) 第5号(7~14) 住居址出土土器(1:4)



第14図 第6号(1~5) 第8号(6~10) 住居址、溝址3(11~14) 溝址2(15~16) 出土土器(1:4)



第15図 グリット出土土器 (1 : 4)



第16図 グリット出土土器 (1 : 4)

第一〇図版 第二次調査遺構分布状態



南西方向より



東より



第4号住居址カマド



カマド右側土器出土状態



須恵器坏出土状態

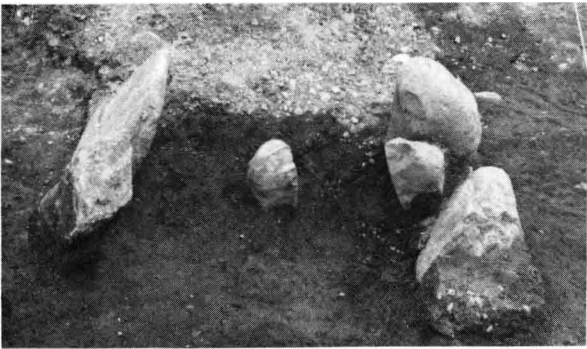


集石



9号 溝址3 8号

溝址2 5号 6号



第5号住居址カマド



第9号住居址



溝址3

溝址2

第8号住居址 (南より)



(北より)



調査



測量



調査団

第一六四版 第三·四号住居址出土土器





第一八図版 溝址二・三その他出土土器



第5章 第3次調査

第1節 調査の経過

1. 調査日誌

5月28日 P T A役員会にて調査協力を依頼する。

6月3日(曇) 本調査に先立ち、表土及び包含層上部まで、遺構の密集度をみるため、南端付近に東西トレンチを重機にて入れたところ住居址らしきもの4ヶ所を確認した。その結果調査地全面を削平することにした。

6月4日(曇のち雨) 今日から人力による本調査に入る。ただ今日は全国的に雨天だそうので、調査の進行が気になる。案の定調査開始後小雨が降り出し徐々に激しさを増す。調査は重機によって表土を除去した遺構上面プランを追求していたため、遺構破壊の恐れがでてきたので、午前で作業を中止する。重機による表土の除去は続ける。遺構面は南に向け傾斜し、南端で深さ1.2mを測る。器材搬入。

6月5日(晴) 重機による表土すき取り作業を進め、終了したところから人力により残土処理をするとともに西側より遺構プランの追求を行う。発見順に遺構番号を付す。西端の第10号住居址は調査区域外に延び、第11号住居址付近は2～3軒重複する。第12号住居址は単独であるが、南半分は調査区域外にある。第10・12号住居址の調査にかかる。信毎記者来訪。

6月6日(晴) 昨日に引き続き表土除去・住居址の掘り下げと、第14・15号住居址のプランの確認を行い調査にかかる。第14号住居址の東側は小礫混りの砂利層になり、遺構が存在しないものと判断されるので、これ以上調査区の拡張をしないことにする。第10～12号住居址の精査を行ない、実測・写真撮影をする。第15号住居址北壁は浅川の洪水により洗われたのか確認できなかった。第14号住居址の覆土は砂利を含み堅い。

6月7日(晴) 昨日に引き続き第14住居址の調査を進める。カマドの位置を確認する。覆土下部より、坏・甕・高坏形土器が多く出土し、上部より灰釉陶器片を得た。新たに第13号住居址の調査にかかる。北東隅より壺形土器頸部下半が直立して出土した他、弥生時代土器片である。長野県短大学生の視察あり。

6月8日(晴) 第13・14号住居址の調査を進める。第14号住居址のカマド付近より完形又は横転した甕形土器・坏形土器が出土し、調査が活気づく。第13号住居址の精査及び実測・写真

撮影後、第16号住居址・土壙1・2の調査をし、本日完掘する。本日で実質作業を終了する。

6月9日(晴) 第5・7号住居址の写真撮影を行い、カマドの断ち割りを行う。遺構実測及び全体測量をして全調査を終了する。調査会長(教育長)の視察あり。

6月10日(晴) 器材の清掃及び撤収作業を行う。

1月 土器洗浄作業を行う。

2月～3月 土器復元・注記作業を行う。

3月 土器復元・注記・実測・整図、図面の整図作業を経て執筆、報告書刊行する。

2. 調査会の編成

本調査会は長野市所在の埋蔵文化財の保護・保存及び調査企画を主なる業務とし、調査結果を有効に生かすため設立されたもので、調査会構成は以下のとおりである。

調査会

会長 中村 博二(長野市教育委員会教育長)

委員 米山 一政(長野市文化財保護審議会会長)

◇ 桐原 健(◇ 委員)

◇ 小林 孚(調査団長)

◇ 横山 勝(長野市教育委員会教育次長)

◇ 関川千代丸(◇ 社会教育課嘱託)

◇ 矢口 忠良(◇ ◇ 主事)

監事 青沼 欣二(◇ 庶務課長)

調査団

調査団長 小林 孚(日本考古学協会々員・須坂高校教諭)

◇ 主任 矢口忠良(◇ ◇ 長野市教育委員会主事)

調査員 原 明芳(長野県考古学会々員・信大学生)

◇ 鳥羽英継(◇ ◇ ◇)

整理補助員 百瀬久雄(◇ ◇ ◇)

◇ 竹内 稔(◇ ◇ ◇)

◇ 直井雅尚(◇ ◇ ◇)

◇ 石上周蔵(◇ ◇ ◇)

◇ 小林秀行(◇ ◇ ◇)

◇ 赤羽史子(信大学生)

事務局

事務局長 丸山 喜正(社会教育課長)

担当局員 相沢 金治(◇ 補佐)

ク	吉池 弘忠 (ク	文化財係長)
ク	矢口 忠良 (ク	ク 主事)
ク	関川千代丸 (ク	ク 嘱託)

3. 調査参加者一覧

(作業員) (PTA) 原田勝子・児島けさ代・橋本照美・柴田一美・野田以志子・西沢紀美・赤川みゆき・平沢久子・高野サカ江・松橋敏子・小田沢敬子・坂本美智子・鈴木久子・若槻雅一・若槻司・小林武夫・石坂勲・塚本麻江・金子治子・福原和子・池田順子・猪股久美子・米倉静江・松倉晴美・佐藤一江・味沢佳代子・上原とし子・竹本礼子・池田桂子・山本蓉子・小池勝・木原その江・菊池昌子・宮沢衣子・伝田まさ子・春原信枝・小林紀子・青木房子・伊藤由子・祖山つた江・小林憂子・戸井田紀世江・原田昭子・中村一二美・糸房君子・田中礼子・祢津清子・小山知・古田正治・北原スミエ・新井志津子・村岡信子・善財鈴枝・鷺沢啓子・竹内富美枝・西岡初子・霜田町子・増田幸子・和田正子・西沢よ志子・古越まち子・山口和子・関川定子・柳沢みち子・内山恵喜・荒木貞子・峰村とし江・山田昌子・津野世伊子・滝沢冒子・加藤トシ・高山由紀子・長谷川谷代・小山美智子・龍圭子・山口恵美子・村松節子・塚田芳子・小林恵子・黒岩トヨ江・武田徳子・相馬貞良・清水力子・藤井朋子・近藤節子・国本昂江・下平悦子・横田和一郎・横地康生・今井英子・今井敏明・前沢端恵・雨宮三代・長谷川嘉子・祖山もとみ・川口よし子・伝田菊美・中野美恵子・神林京子・渡部田鶴子・越のぶ子・猪飼滋子・松本菊子・小林一三(会長)

(補助団体) 三輪小学校・同校PTA・教委学校施設課・建設部建築課・長新建設・滝沢建設共同企業体

以上第1～3次調査で記した方々、団体の方々には多大な御援助をいただいた。記して感謝の意を表します。

第2節 遺構と遺物 (第17図)

第3次調査で検出した遺構は、住居址7軒と土塋2基である。検出面は砂利層を避け、黄褐色粘質土層で、覆土は砂利混り黒褐色粘質土である。ただ第14号住居址東側の一部は砂利層を掘り込んでい、それ以降東側は礫を伴う砂利層になり、遺構遺物はない。

1. 第10号住居址 (第18・21図, 第19・25図版)

遺構 調査地西端にあり、北・南壁の半分以上、西壁は調査地域外に延びる。プランは方形を呈し、南北壁間が6.95mの規模である。検出遺構軸方向はほぼ南北である。壁はやや傾斜し

北壁21cm・南壁10cm・東壁15cmの掘り込みである。床面は平坦で軟弱である。柱穴は東壁に添って3個確認され、径30cm・深さ5～29cmを測る。その他の施設はない。第16号住居址を切る。

遺物 遺物は少なく、すべて覆土からの出土である。器種として高坏・坏・甕形土器の3種である。滑石製紡錘車が1点出土した。

2. 第11号住居址（第18・21・25図，第19～21図版）

遺構 第1号住居址の東側に隣接し、第13号住居址と重複する。プランは東壁がやや短かい不整形で、規模は東西軸が長く3.15mで南北軸が最も短い西壁で2.92m測る。主軸方向はN—25°—Wである。壁はやや傾斜し、掘り込みは西壁8cmで最も浅く東壁でも21cmにすぎない。カマドは北壁東隅よりに設けられ、粘土製両袖形のものである。規模は主軸55cm・巾63cmで、内に焼土が残存する。柱穴は北東隅に径29cm・深さ8cmのものが1個あるのみである。

遺物 遺物は少なく、カマド周辺より坏・鏝釜・小形深鉢形土器片を得た他、滑石製紡錘車・鉄斧形の鉄製品が各1点出土した。

3. 第12号住居址（第18・21図，第20図版）

遺構 調査地中央付近より検出したもので南壁付近は調査地外に延びる。東西軸5.05mの方形プランを呈し、主軸方向はほぼ南北である。掘り込みは浅く、5～7cmで、壁はやや傾斜する。床面は平坦で、軟弱である。カマドは北壁中央西よりにあり、袖端部に角礫を配する粘土製両袖形のもので、主軸50cm・巾83cmの小規模のものである。他の施設はない。

遺物 出土量は少なく、カマド周辺より甕・坏・高坏形土器片を得たのみである。

4. 第13号住居址（第19・23～25図，第25図版）

遺構 第16号住居址との新旧は不明であるが、第11号住居址に西北隅の一部が切られる。プランは東西軸4.5mを測るが、南北に長い隅丸方形を呈する。南壁は調査地域外に延びる。掘り込みは傾斜を有し深く、北壁40cm・東壁43cm・西壁38cmを測る。床面は平坦であるが、傾斜にしたがって南へ傾斜、中央付近は堅く踏み固められる。柱穴は西壁に添って2個確認され、径30～45cm・深さ10cmのものである。その他の施設は確認できなかった。北東隅より正位の状態で壺形土器が出土した。

遺物 出土量は比較的多い。甕・壺形土器片が多く、赤色塗彩された鉢・高坏形土器片が混入する。第23図7は白褐色を呈し、小砂を含み、赤色塗彩される台付壺形土器で、他のものと色調・胎土が異なる。また8も白褐色を呈し、所謂折り返し口縁で、外面に条痕を施し、他のも

のと相違がある。壺形土器の頸部文様は櫛描平行沈線文・T字状文で、甕形土器には櫛描波状文と頸部の簾状文で飾られる。

5. 第14号住居址（第20・21～23・25図，第22・23図版）

遺構 調査地東端より検出されたもので，東壁の一部を砂利層を掘り込む他は，黄褐色砂混り粘質土からである。プランはやや胴張りの隅丸方形を呈し，主軸方向をN-11°-Wになる主軸7.10×東西軸6.85mの規模のものである。壁は直で，北壁38cm・南壁18cm・東壁33cm・西壁22cmの掘り込みである。床面は南に向け傾斜するが，平坦で軟弱である。柱穴は4個検出され，方形配列になる。規模は径40cmで深さ15～25cmの範囲にある。北西隅のものには平石が入る。カマドは北壁中央に設けられ，主軸85cm・巾125cmの規模で，袖端部に袖石を有する粘土製両袖形のものである。煙道は住居址外へ1.5m・巾32cmの規模で延びる。袖石間に長軸43cm・巾13cmの遮蔽石が置かれる。北壁下西半分・東壁南から南壁下に巾12cm・深さ3～4cmの周溝がめぐる。遺物はカマド周辺からの出土が多く，甕・甕形土器はカマド両側より，坏形土器は前面からの出土が多い。

遺物 出土量は割合多く，高坏・坏・甕・甕形土器の器種がある。坏形土器は碗形のものと同縁部が立ち上がり外開するものがあり，底部整形はヘラ削りが施される。甕形土器は長胴の烏帽子形のもので，第22図3は水滲粘土により再調整される。

6. 第15号住居址（第19図）

遺構 表土下30cm前後のところから発見されたもので，北壁は浅川の氾濫により削り去られたのか，後世の開発によるものかはっきりしないが，東西壁の一部及び南壁のみ確認したもので，隅丸方形プランになるものと思われる。東西軸5.45mを測り，南北軸はN-14°-Wの方向になる。検出遺構の壁は低く，東で12cm・西で9cm・南で5cmを測る。床面は南に傾斜し，軟弱である。その他の施設は不明である。

遺物 出土量は少なく，わずかに内面黒色処理された坏形土器，烏帽子形を呈すと思われる甕形土器片を得たのみである。

7. 第16号住居址（第19図，第19図版）

遺構 調査地西南端より発見されたもので第10・13号住居址と重複しているため，北壁の一部のみ検出したにすぎない，覆土に砂利の混入が著しい。壁は直に近く，21cmを測る。床面は平坦で軟弱である。

遺物 出土遺物はなかった。

8. 土壙 1 (第20図)

遺構 調査地中央付近より検出したもので、南壁は調査時には削平されており、北側のみ16cmの深さで残存する。プランは東西軸1.6×南北軸1.1mの不整楕円形である。

遺物 出土遺物はなかった。

9. 土壙 2 (第20図, 第22図版)

遺構 第14号住居址の南側から発見され、上部プランは方形に近い形状にあったので、井戸址と考えたが、壁が傾斜し北側で55cmの掘り込みが以外と浅く、井戸と考えられない。規模は南北2.4m・東西2.25mである。

遺物 出土遺物はなかった。

(矢口忠良)

第10号住居址 (第21図)

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 土
		器 高	口 径	底 径					外 面	内 面	
1	高 坏			10.8	脚部が長く、底部ちかくでひらく	ヘラミガキ・ヨコナデ	砂まじり	不良	灰褐色	灰褐色	覆
2	〃			13.8	ゆるやかに底部にむけてひらく	〃	〃	良好	赤褐色	〃	
3	坏	4.7	12.3		椀形 丸底	ヘラミガキ・ヘラナデ・ヨコナデ	〃	〃	灰褐色	黒 色	
4	甕		17.2		頸部が鋭くくびれる 口縁が外反する	刷毛状工具による整形 (7本)・ヨコナデ	小石まじり	〃	暗褐色	暗褐色	

第11号住居址 (第21図)

5	坏		13.2		椀形	ロクロナデ・ヨコヘラミガキ	砂まじり	良好	灰褐色	黒 色	床
6	罍釜		23.4		口縁がやや内弯	ロクロナデ	小石まじり	〃	灰褐色	暗褐色	
7	深鉢		20.0		体部やや内弯しながら口縁部にいたる	〃	〃	〃	〃	灰褐色	

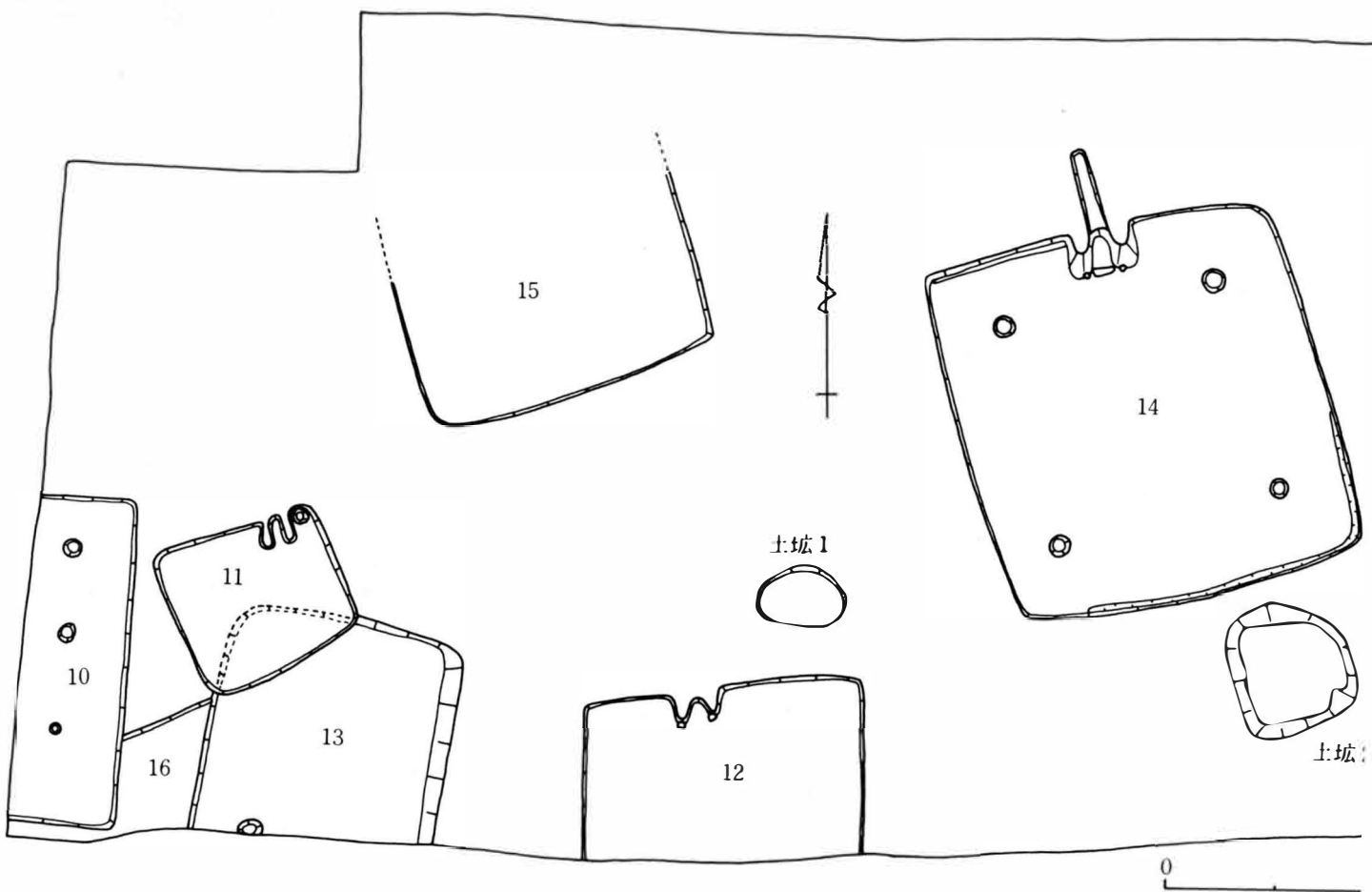
第12号住居址 (第21図)

8	高 坏		17.6		平底にちかく、口縁が外開	ヨコヘラミガキ・ヘラナデヨコナデ	砂まじり	良好	灰褐色	黒 色	床
9	坏	4.1	13.7		口縁ちかくに段・丸底	〃 〃	〃	〃	〃	〃	
10	〃	5.3	13.4		口縁がやや内弯・丸底	ヨコヘラミガキ・ヨコナデ・ヘラナデ	〃	〃	〃	〃	

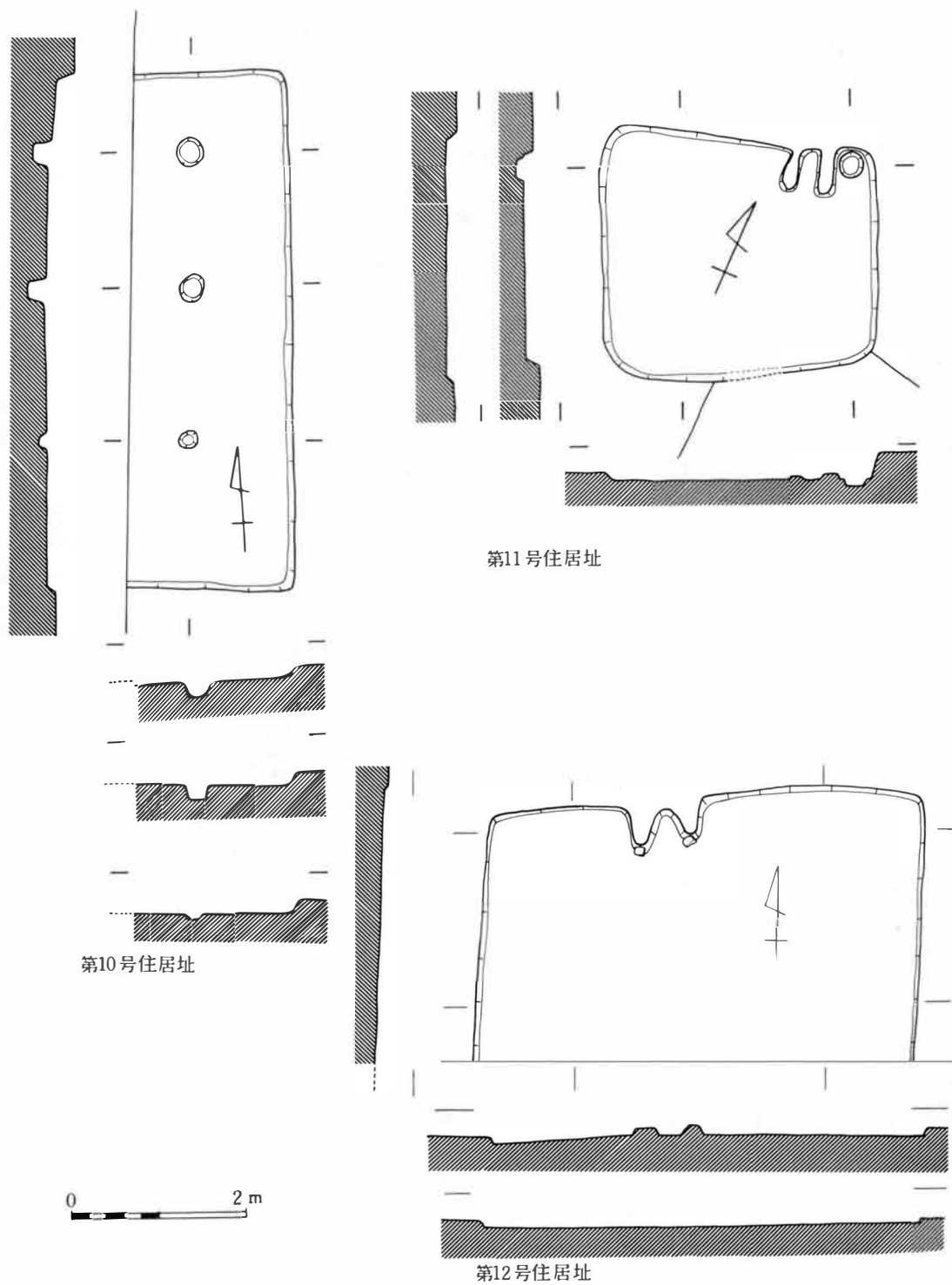
第14号住居址 (第21~23図)

11	高 坏			7.6	底部ちかくで開く 杯部が椀形	ヘラナデ・ヨコナデ・ヨコヘラミガキ	砂まじり	不良	灰褐色	黒 色	床
12	坏	3.7	14.1	5.1	底部ちかくに段	ヨコヘラミガキ・ヨコナデ・底部ヘラケズリ	〃	良好	〃	〃	
13	〃		11.4		〃	ヨコナデ・ヘラケズリ	〃	〃	〃	灰白色	
14	〃	3.1	13.2	6.9	椀形	ヨコヘラミガキ・ヨコナデ・ヘラナデ	〃	〃	〃	灰褐色	
15	〃	4.5	8.9		丸底 体部に段内面底部に段	ヨコヘラミガキ・ヨコナデ	〃	〃	暗褐色	黒 色	
16	〃				丸底 体部から開く	刷毛状工具による整形・ヨコナデ	〃	不良	黒褐色	黒褐色	
17	〃		13.8		体部に段あり、口縁やや開く	ヨコナデ・ヘラケズリ	〃	良好	暗褐色	灰褐色	

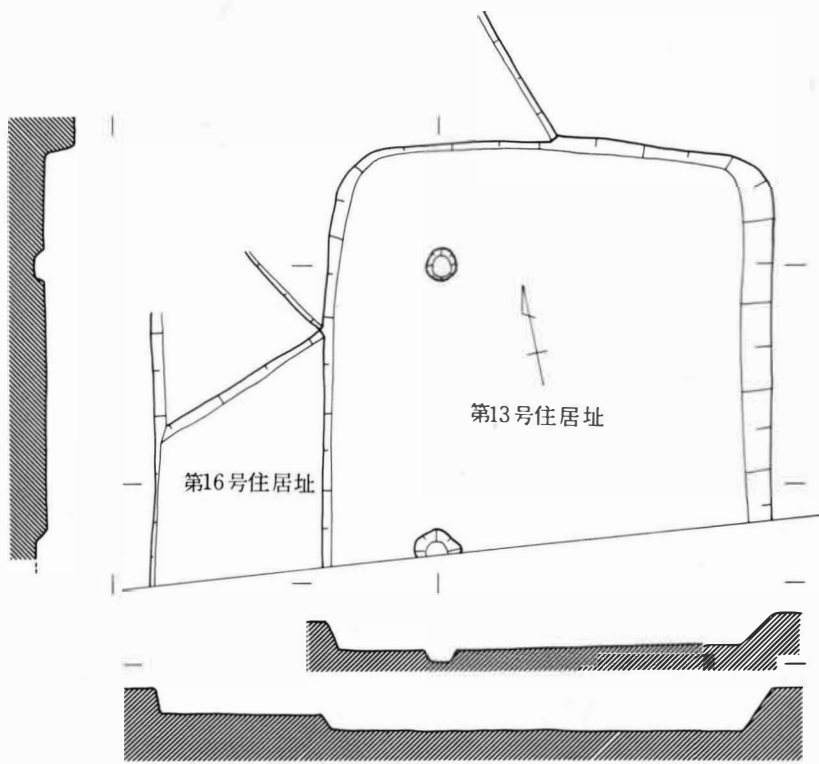
遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	
		器高	口径	底径					外 面	内 面
18	坏		14.1		体部に段あり・口縁がやや内弯	ヨコナデ・ヘラケズリ	砂まじり	良好	灰褐色	灰褐色
19	〃		10.8		直線的に口縁に	ヘラナデ・ヨコヘラミガキ	〃	〃	暗褐色	黒 色
20	〃	5.7	11.4	4.3	平底・口縁がやや外弯	ヨコヘラミガキ・ヨコナデ・ヘラナデ	〃	〃	灰褐色	〃
21	〃	12.4	12.1	5.4	鉢形・口縁が内弯	ヨコナデ・ヘラナデ・ヨコヘラミガキ	〃	〃	赤褐色	〃
1	甕	17.8	14.8	7.9	壺形・口縁がやや外反・肩部がはる	ヨコナデ・底部ヘラケズリ・ヘラナデ	小石まじり	〃	灰褐色	灰褐色
2	〃	22.3	19.6	7.4	口縁に最大径、やや外反・烏帽子形	ヘラナデ・刷毛状工具による整形・ヨコナデ	〃	〃	〃	〃
3	〃		20.6		烏帽子形・口縁に最大径、やや外反	7本単位の刷毛状工具による整形・ヨコナデ・ヘラナデ	〃	不良	〃	〃
4	〃	31.1	16.5	6.4	体部に最大径・烏帽子形	8本単位の刷毛状工具による整形・ヘラナデ・ヨコナデ	〃	良好	暗褐色	暗褐色
5	〃		19.8		体部が直線的・烏帽子形・口縁がやや外反	タテヘラケズリ・ヨコナデ・ヘラナデ	〃	〃	赤褐色	灰褐色
6	〃		17.6		口縁が外開	ヨコナデ	〃	〃	〃	〃
7	〃		14.4		口縁が外反	〃	〃	〃	灰褐色	〃
1	〃			7.1	烏帽子形	7本単位の刷毛状工具によるナデ・ヘラナデ	〃	不良	〃	〃
2	〃		20.4		烏帽子形・口縁が外開	ヘラケズリ・ヨコナデ	〃	良好	暗褐色	茶褐色
3	甕	12.5	16.1	4.8	口縁から底部に直線的	ヘラケズリのちヨコナデ・ヨコナデ	〃	〃	灰褐色	暗褐色
第13号住居址 (第23区)										
4	高坏			9.8	脚部はやや開きながら底部へ	ヘラミガキ・ヨコナデ	砂まじり	良好	赤 色	赤褐色
5	甕		19.4		口縁がやや外反	6本単位のクシ状工具による波状文 7本単位の 〃 れん状文	〃	〃	灰褐色	黄褐色
6	〃		23.2		〃	口縁端部が内弯	〃	〃	〃	灰褐色
7	壺				体部下半に段をもつ	刷毛状工具によるナデ・ヘラミガキ	〃	〃	赤 色	〃
8	〃		14.3		複合口縁・体部が開く		〃	不良	灰褐色	〃



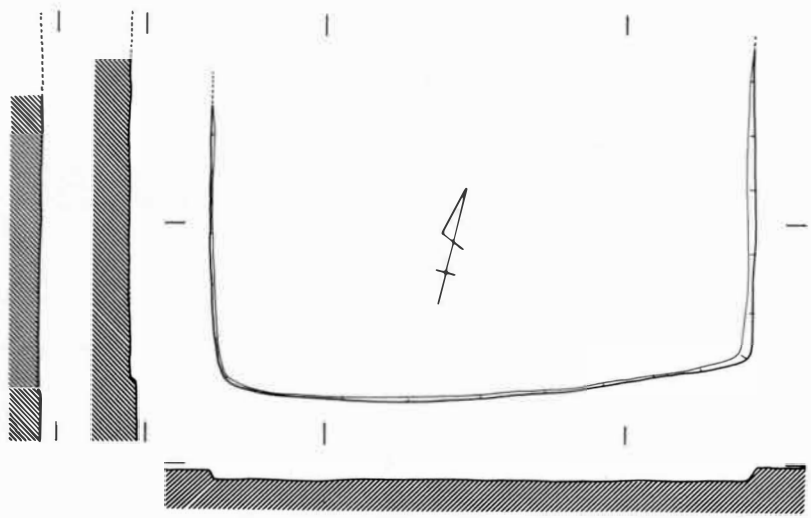
第17図 第3次調査遺構分布図 (1:160)



第18图 第10~12号住居址实测图 (1:80)



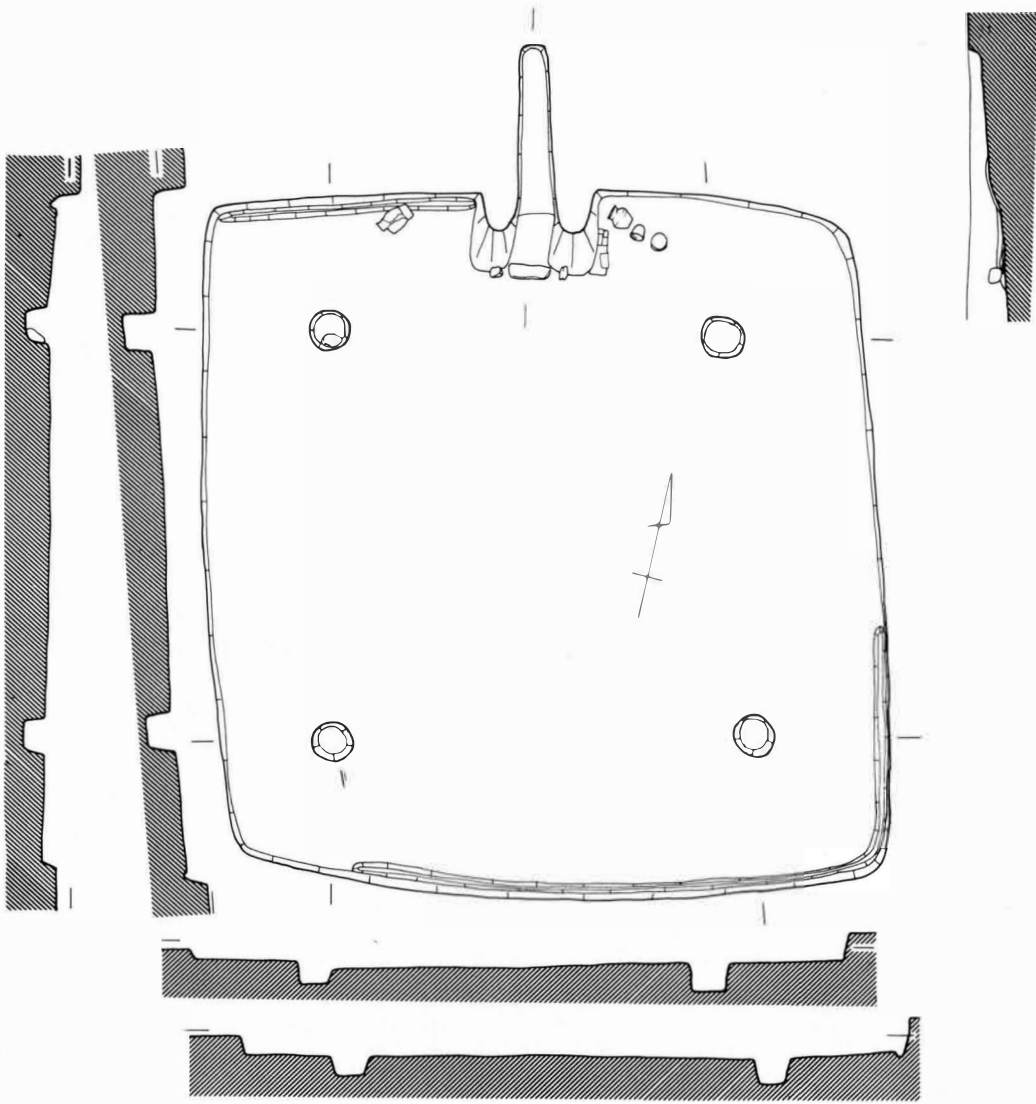
第13・16号住居址



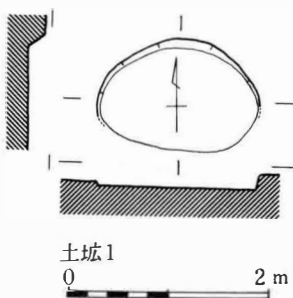
第15号住居址



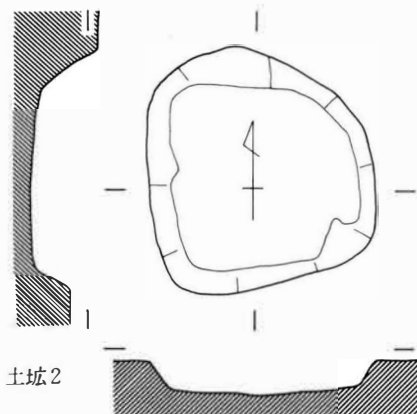
第19图 第13・15・16号住居址実測図 (1:80)



第14号住居址

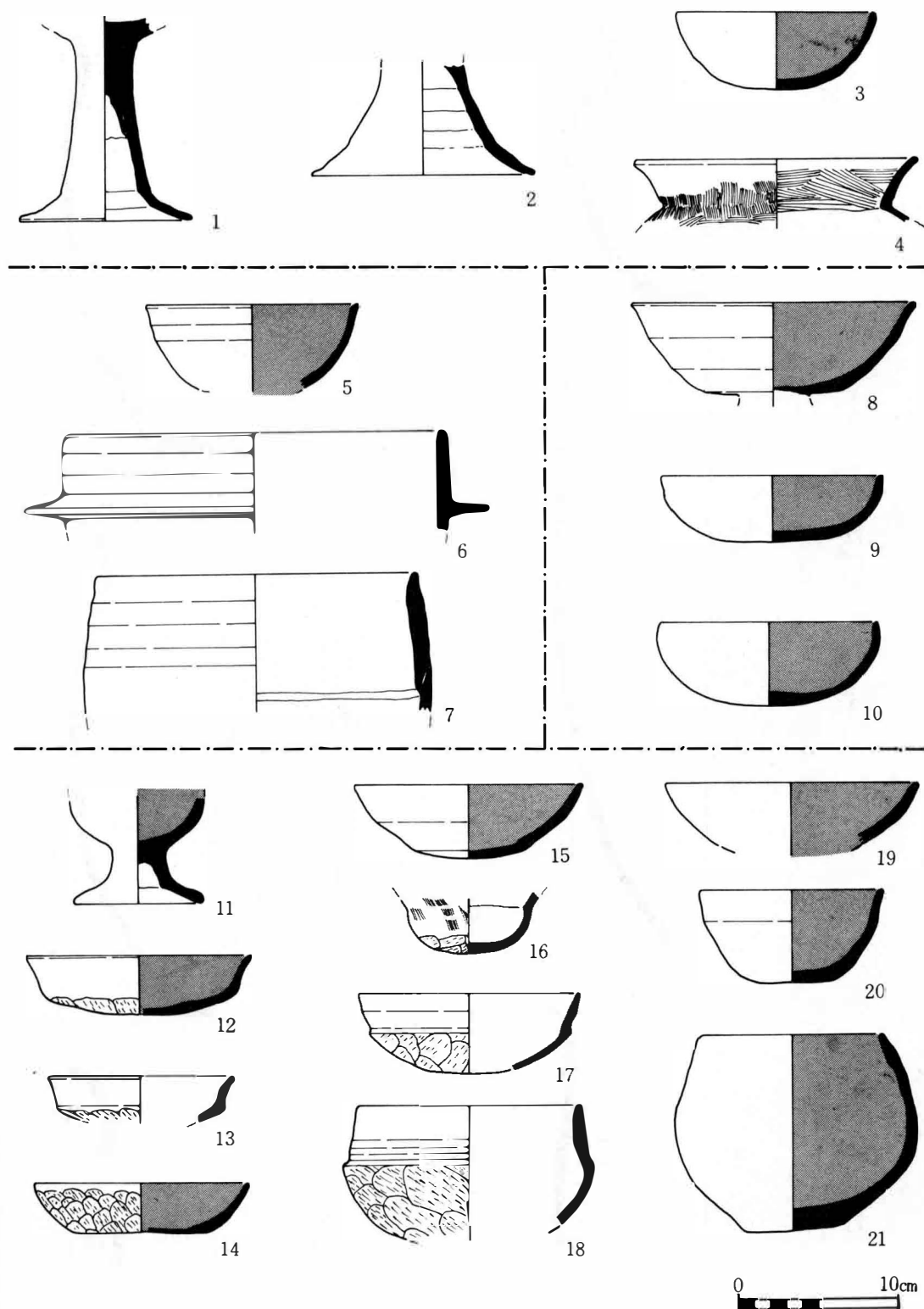


土塚1
0 2 m

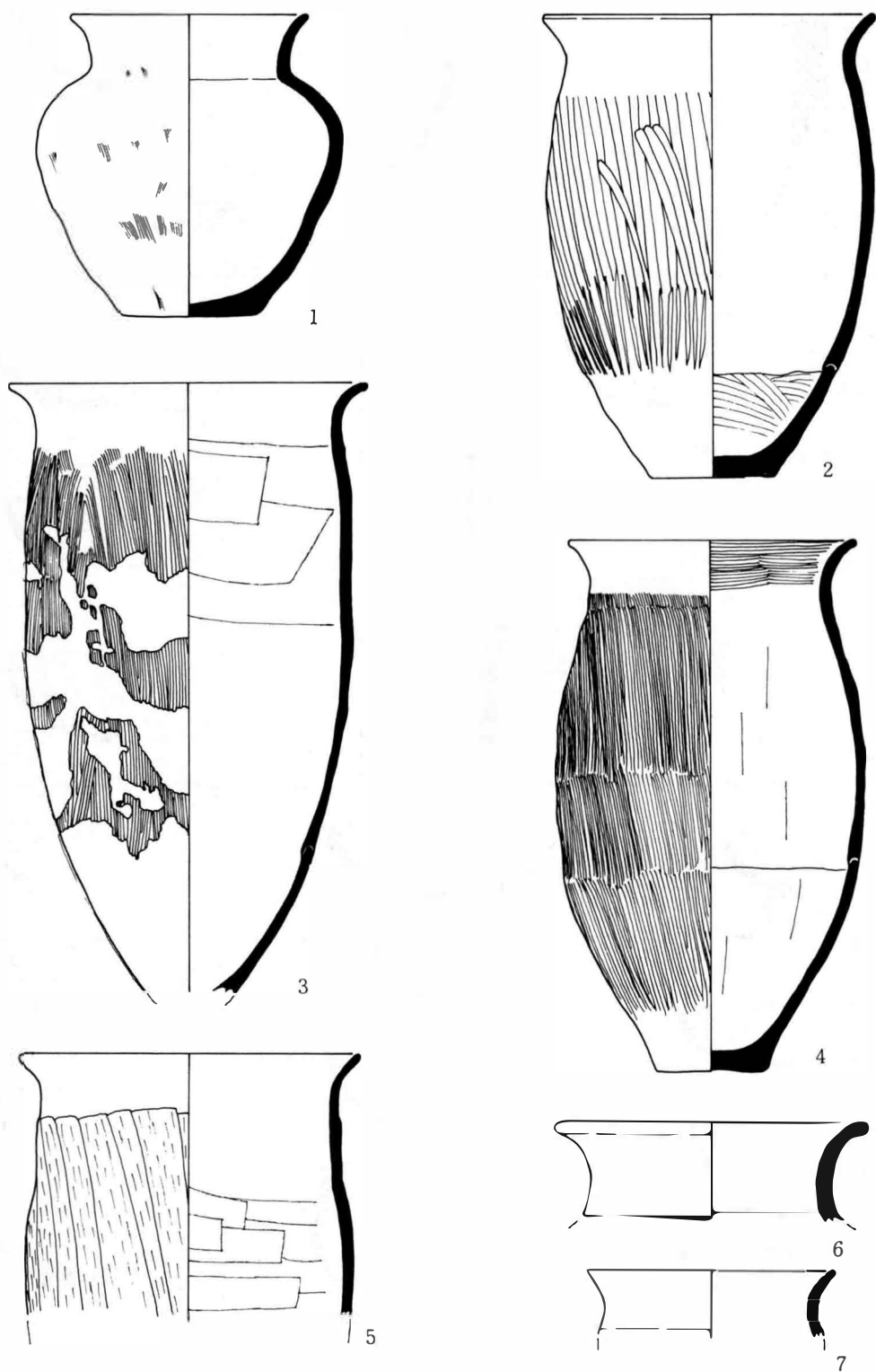


土塚2

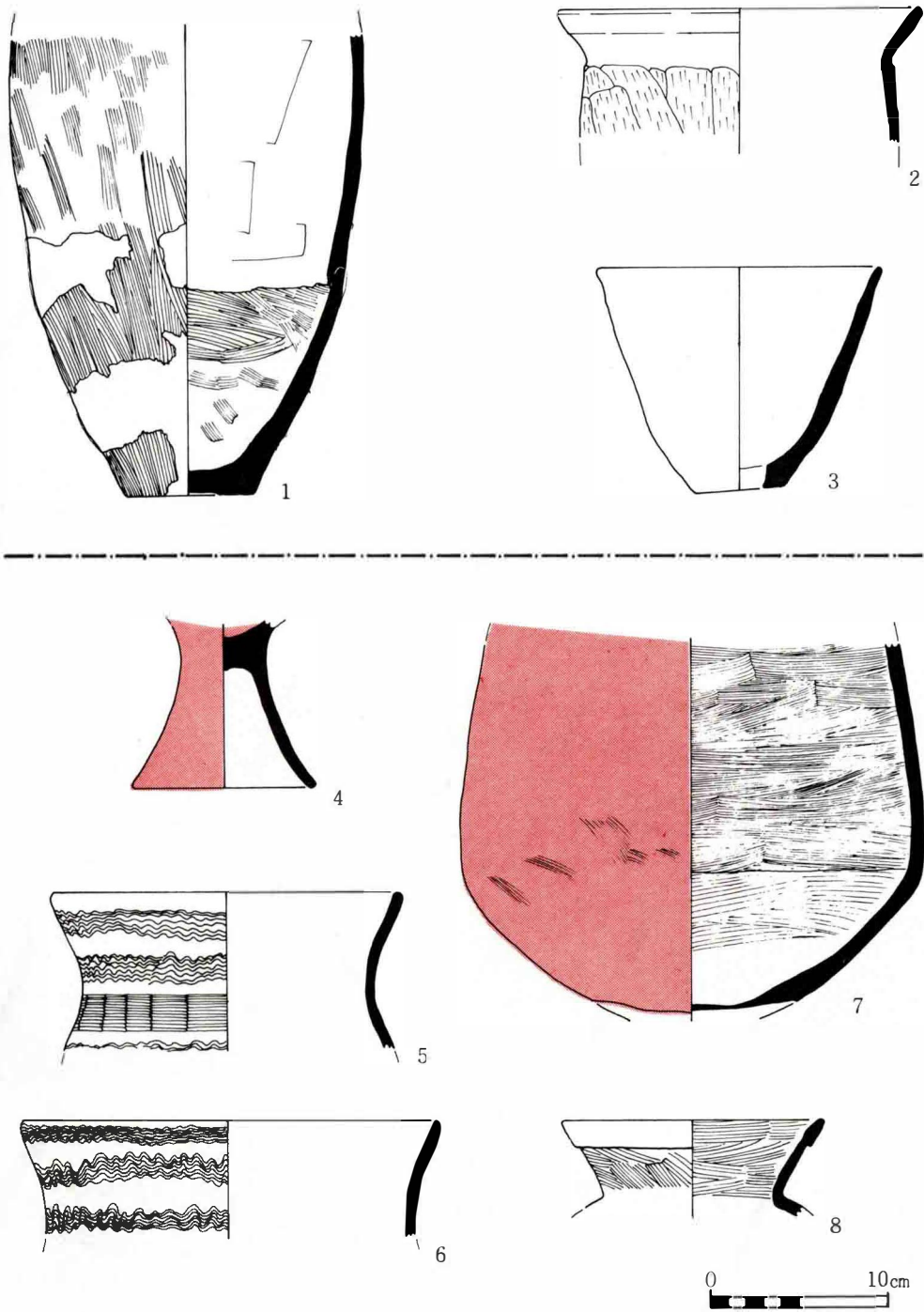
第20図 第14号住居址、土塚1・2実測図(1:80)



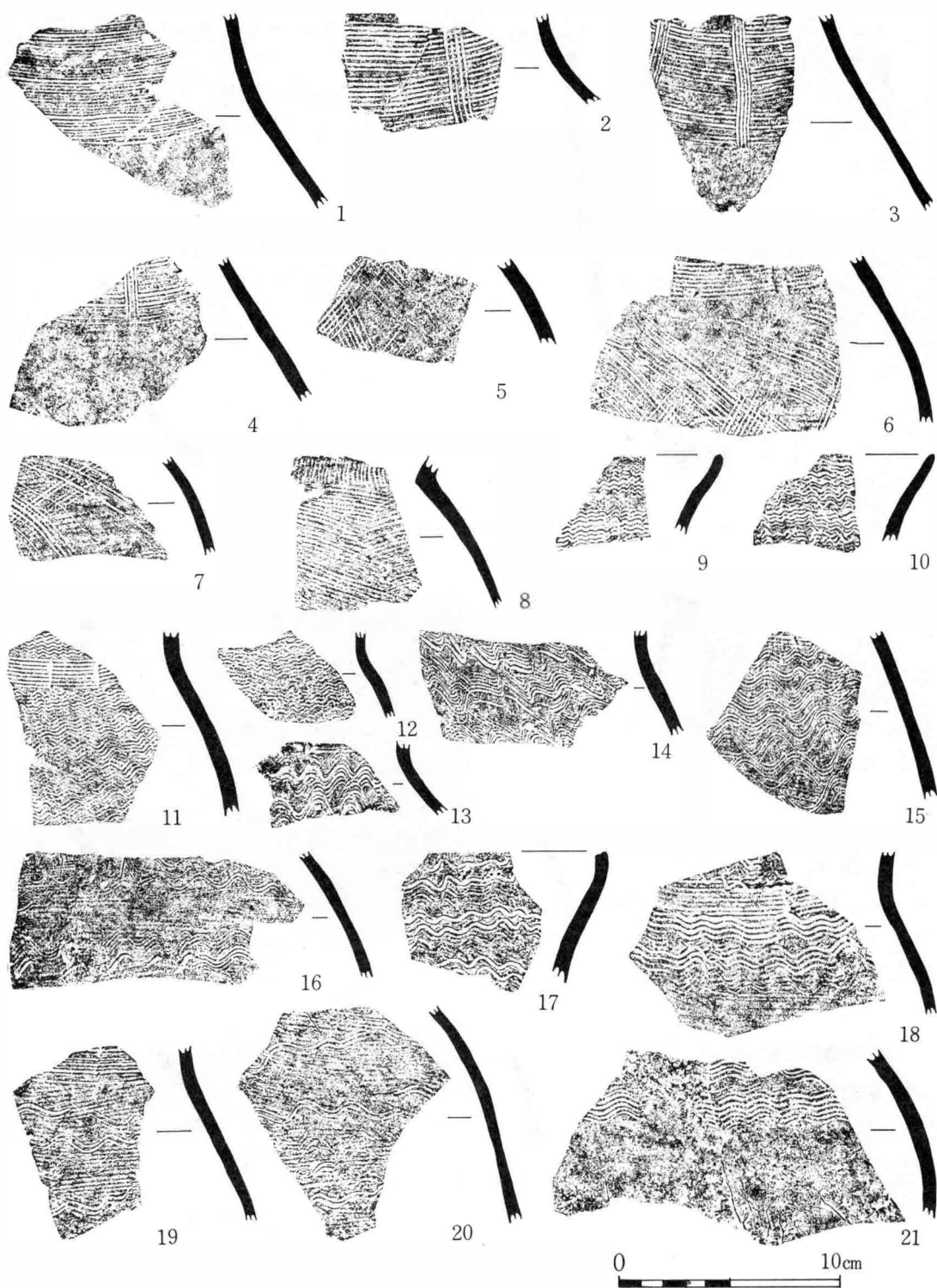
第21图 第10号(1~4) 第11号(5~7) 第12号(8~10) 第14号(11~21) 住居址出土土器 (1:4)



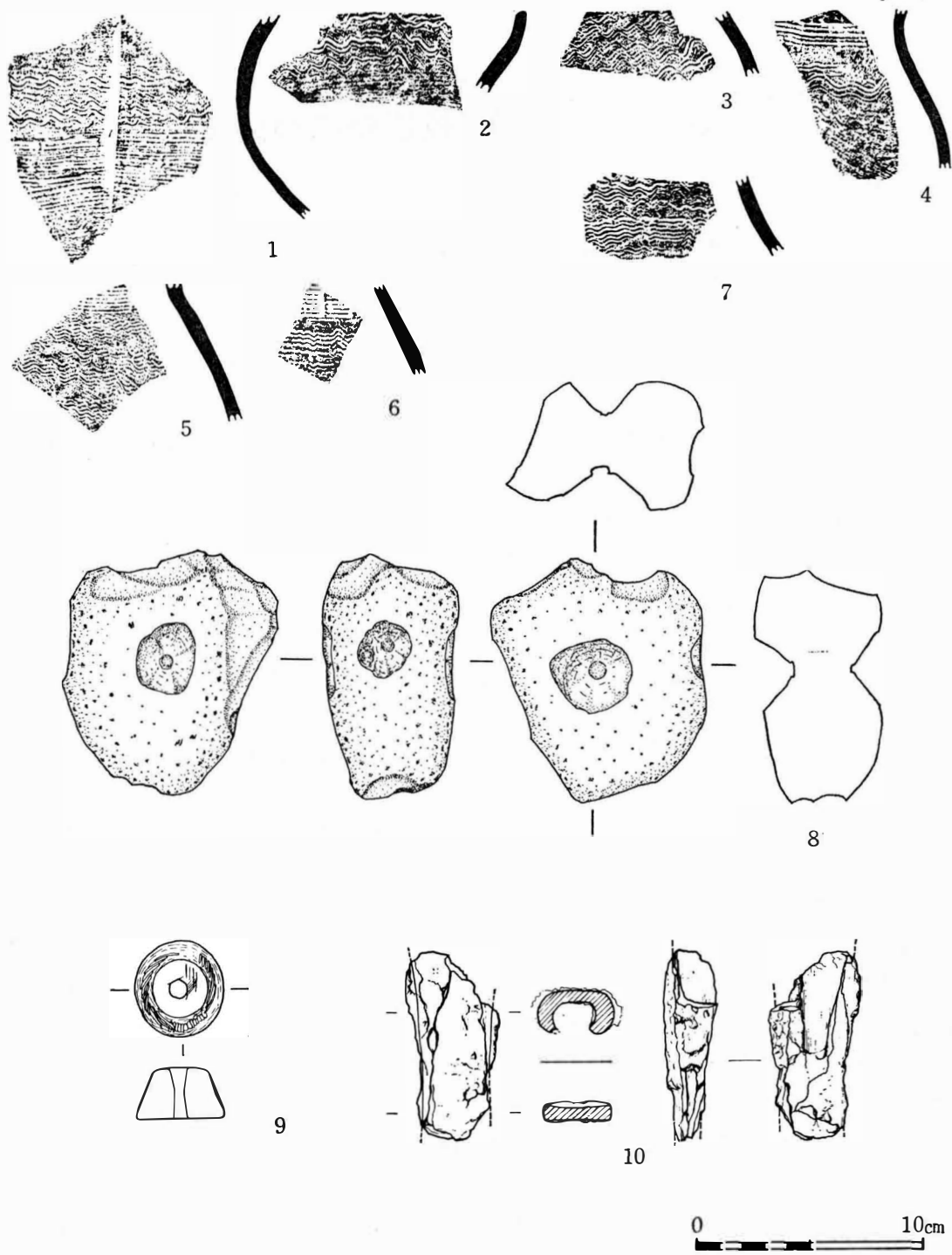
第22図 第14号住居址出土土器 (1 : 4)



第23図 第14号(1~3) 第13号(4~8) 住居址出土土器 (1:4)



第24图 第13号住居址出土土器拓影 (1:3)



第25図 第14号住居址出土土器拓影、第14号住居址出土凹石、
第11号住居址出土紡錘車・鉄製品（1：3）

第6章 三輪小学校遺跡について

三輪遺跡の範囲の確定は、そのほとんどの地域が市街化されており、小規模工事等により偶然発見の遺物をもってなされているのが現状で、その実態はいまだに不明である。今後の調査により、当地域の開発開始時期・文化史的内容を更に詳細になされるものと考えるので、ここでは三輪遺跡内の1地点である三輪小学校敷地での第1～3次調査の結果をまとめることにしたい。

第1次調査では住居址2軒・溝址1ヶ所、第2次調査では住居址7軒・溝址3ヶ所を検出した。その時期は古墳・平安時代に限られ、その他の時期の遺物・遺構はなかったが、第3次調査において、住居址7軒、土坑を2ヶ所検出し、このうち第13・16号住居址は弥生時代後期に属するものである。従来表採遺物から弥生時代の生活遺構の存在が予想されていたが、今回の調査で住居址を検出したことは、浅川扇状地傾斜面における開発が弥生時代中期頃より開始されたとしても、その本格的展開が後期の箱清水期までさかのぼることを意味していよう。その後更に開発が進んだと考えられ、下宇木B遺跡にみられる大甕・坏形土器の変遷をたどりながら古墳時代に至って爆発的発展をする。本調査地の主流遺構・遺物は該期にあたり、調査結果にみられるようにこの扇状地形上に拡散して存在していた可能性が強い。これについて各次の調査で多いのは、平安時代の遺構遺物である。しかし遺物の割に遺構の確認がなく、第2次調査で顕著にみられる如く表土下すぐに遺物が残存する出土状態が多く、表土と判断した砂利混り黒色土層に掘り込まれたものか、それとも浅川の氾濫により遺構上部が削り取られたとも考えられるが、土器の出土状態・上面土層のあり方より、後者の要因によるものとの感を強くしている。

遺構 第1～3次調査で注目すべきものに、第2号住居址のあり方とカマドがある。第2号住居址は主軸11.8×東西軸9.7mと大規模なもので、県内では平出遺跡第11号住居址の11.0×10.0mに次ぐものである。この性格を考えるに、山岸遺跡の遺構分布図を参考にすると、第34号住居址のみ一辺が9m前後と他に比べ大形で目立つ存在である。この遺構は遺跡中央にあったかどうかは不明であるが、その付近に位置していたと思われ、また高坏形土器が他の遺構に比べ多く出土しており、首長者の家屋又は祭祀を伴う所謂集会場の利用を考えられる重要施設であったことは間違いなからう。今回調査した第2号住居址も同様なことが想定でき、遺物についてもカマド周辺から甕形土器のみ多く出土したが、他からは高坏形土器破片が多いし、器形を復原し得る土器も多い。次で上屋構造を知るうえでの炭化材である。検出は住居址内側各壁近くより認められ、ただカマドを中心とする北壁及び中央付近にはない。これを消防署的に解釈すれば、火元はカマドにあり、火勢は強く、棟高部（所謂グン部）に火が入り、それによ

り上屋がつぶれ残存するといったところである。そのため柱穴及びその付近には材が生だったため、残存することができなかったものと理解される。さてその残存物は丸木をそのまま使用したもので、角材と思われるものはなかったし、また支柱たる性質をもつ材をも確認しえなかった。用途的には極木及びそれを個定する横木と考えられる。材質は柳かと思えるが、木材をあつかう専門家でも定かではなかったし、その意見から、松・樫等のものが含まれているようである。東壁付近からの炭材には直径12cm前後のもの普遍的に出土するから、推定でこの数値に近いものが用いられたのであろう。その出土状態は西・南で高く、下に覆土を有し、北・東ではレベル的に低く、床面に近くなり、住居中央付近は床面に近接する。

さて次の問題は所謂ベット状遺構及び各壁下から直角に伸びる溝状遺構とその先端に配置されたピットである。住居内の用途使用を考える上での一新知見の資料である。近くでは時期が異なるが御屋敷遺跡を除いて他にはない。この溝は水等に関するものとは思われない、浅く、巾の広いもので、先端ピットとのかかわりの中で、間敷切り施設と考えられるが、この内より出土遺物がなかったため、その目的、使用方法等わからなかった。柱穴は主軸に2個の棟持柱を配し、支柱は各隅付近にあり、方形配列になるのであるが、ベット状遺構との関連の中で、支柱穴の位置が移動している。即ち、棟持柱を有す小形のものから、更に住居を拡張しベット状遺構を作り出した関係から、西・南方向に動き、これに伴い、カマド前の棟持柱が廃棄され、カマドの位置も、西に移動する。当初住居のありかたについて、本遺構は2軒の住居址が重複したものであると考えたが、先に述べた炭化材の関係、溝状遺構及び覆土遺物の関連から時間差のない同一遺構であろうと結論づけた。

次に古墳時代カマドのあり方についてみてみよう。本文では粘土製両袖形と記したが、この表現はおかしく、むしろ造出しのカマドである。第6号住居址の石芯のものは粘土製とよばれる他は、住居址の掘り込みの時点でカマドの位置が設計されており、袖部は地山を残す形で造り出される。そして両袖先端に礫を配し、第6号・14号住居址の袖石間にはカマド内を遮蔽する平石が置かれ、天井石が落ちたものでなく、意識的なものである点新知見の一つである。

遺物 弥生時代の遺物では遺構とともに検出された第13住居址の特に壺形土器に特色がある。色調が白褐色を呈し、小砂を含み、他の遺物とは異色なもので持ち運ばれてきた可能性があり、先学の教示を得たい。また古墳時代の遺物では第1号住居址より甕形の、第4号住居址より坏形の須恵器が出土し、地域的に先進地であったことを物語る資料として注目される。遺物としてもう一つ気になるのは奈良時代（善光寺平第4様式）に比定されるものがないことである。古墳時代から平安時代へ直接連結してしまう。善光寺に近い位置にあり、古代東山道支道にそれほど遠くない要地にあった当地に何故にその存在の痕跡をとどめていないのであろうか疑問が残るところである。今後の調査研究に期待したい。

以上調査による代表的成果を私見を加えながら瞥見してみたが、独断と偏見がままあろうが、考古学的立場のみでなく、地域学的研究に役立てばと思っている。 （矢口忠良）

参考文献

- 笹沢 浩 「長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器」『長野県考古学会誌』8
中央道遺跡調査団「山岸遺跡」昭和46年
平出遺跡調査会「平出」昭和30年

おわりに

校舎改築に伴い、その都度調査をし、3次4年間に亘った。この間逐次調査報告書の刊行をと思いつつ、学生調査員の尻をたたきながら遺物及び図面の整理等を進めてきたのであるが、私の力不足と次年度の校舎改築事業があるということで、まとめて報告しようと甘えが生じてしまい途中でその気迫が抜けてしまった。調査報告書刊行まで長時間を費やし、調査及び整理まとめ等に尽力をいただいた米山、小林調査団長をはじめ、学業の間及び休日に終日尻をたたかれた若い調査員、灼熱の太陽のもとで連日調査に協力いただいた三輪小学校PTA、須坂高校及び長野吉田高校・長野西高校地歴班の皆さんには誠に申し訳なく思っている。

ようやく3次にわたる調査の結果を世に出すことになり、前記した皆さんの労をねぎらうことができ喜びに堪えないところである。一方、汗顔のいたりと思う気持が強い。

何はともあれ、調査結果をそのまま提示することが、埋蔵文化財保護のために、役立つものと思えるし、三輪遺跡が周知されることにも必要なことであり、またこれらの資料が学術上重要なものになるであろうと確信している。

こうした意味をこめて上梓した本報告が広く各分野で利用活用され、内容等について御叱責・御指導をいただければ望外の喜びであり、またそれを期待してやみません。

ちなみに、本書が上梓する期間内に、調査時の担当者であった三井茂（社会教育課長）・中村邦雄（社会教育課文化財係長）が若くして身罷った。これからというときに惜しい人を失なったという感時は時がたつにつれ増長し、現場でのありし日の姿が臉に浮かぶ。

本書を御霊前に捧げ、御冥福を祈ります。合掌。



第10・11・14・16号住居址



第10号住居址



第11号住居址



第12号住居址